プロレタリア革命

第 2 号

1979.4

労働者共産主義委員会
神奈川県委員会

プロレタリア革命

才2号

目　次

新「怒涛」派を批判する……2
労働者共産主義委員会の総括（その三）……14
〈学習資料〉農業問題に関する
レーニンの見解……32

新「怒涛」派を批判する

この間、新「怒涛」派は、一定の総括にもとづく諸見解を、今やっと公表し始めた。

いわく、「レーニン主義的党組織建設をおしすすめよ！」（怒涛一六三・一六四合併号）、いわく、「世界革命運動の前進と日本社会主義革命の勝利のために大奮闘しよう！」（一七〇号）、そうして、「公然たる革命党の再編論議は日本革命運動の発展強化にとって絶好の機会である」（一七一号）などと主張している。

我々は、これらの中で、彼らが次の様に主張しはじめるとき、大きな疑問を呈さざるを得ないのである。いわく、

「現在、日本の革命党派は四分五裂し、その政治的階級的色合いも様々であるが、おしなべて混迷と分散、サークル状態を抜け出ていず、労働者階級との結びつきも極めてうすい段階にとどまっている。

最近になってこの現状から脱却しようとするいくつかの試みがみられ、日本共産主義運動の歴史的総括と教訓、真しな反省と自覚のもとに党的再編統合をはたそうとする希求がつよまっている。それは、マルクス・レーニン主義に立脚した革命党の建設をもとめる日本の共産主義者とプロレタリアートの先進分子の率直な願いをあらわしている。

わが委員会は、かかる願いを共有する重大な意議を承認し、ともに隊伍をととのえる用意がある。」と。

新「怒涛」派の諸君が、諸党派の再編統合による単一革命前衛党建設を志す潮流へ方向軽換したことを、我々は手ばなしで歓迎しているべきであろうか。それにしては、彼らには清算主義以外に、何の自己総括もないのである。清算主義とは何ら本質的総括を必要とせず過去を断罪して乗り移り主義的に方向転換出来る利点があることを、彼らは発見したのである。

「転換した方針が革命的であれば、乗り移ることは革命的である」とは、旧臨中派の一同志の言葉であるが、ここに一理あることは認めよう。すなわち、「誤まった方針にしがみついているよりはましである」という意味で。しかし、党レベルで、全共産主義者、プロレタリアート総体に語りかける立場を自認する者の作風であるならば論外である。

我々は、九・一五闘争の敗北が我々に突きつけたもの、又その総括をめぐって展開された労共委内部闘争を総括し、自己の当面の組織的任務を、プロレタリア階級の単一革命前衛党建設においたのである。

「唯一回の攻撃の失敗、それだけで組織がもたない現実、このことは、われわれにとって何を意味していたのか？」（プロレタリア

革命創刊号一〇頁）

「要するに、結果的に九・一五闘争がわれわれに突きつけたものは、労共委の全面的総点検であったのであり、従来の独善的ドグマの上にあぐらをかいたままの姿勢では、もはやわれわれは、一歩も先へ進めない、という現実であった。」同右）

「サークル主義的組織（又はサークル）が、『党―階級一元論』を認識したとたんに『党』に転化するという、このドグマを徹底的に暴くことから、われわれの総括を始めた。」（同右）

我々は、これらの総括作業の中で、労共委にとどまらず、新左翼総体が深く毒されてきた主観主義をえぐり出し、その克服の一歩としても、単一革命前衛党建設を当面の方針として打ち出したのである。

そもそもサークル状態の克服（からの脱却）とは、その為の努力は認識したら直ちに着手すべきことと、この克服が一サークル内の自覚や宣言、自己規定ないしは自称によって達成できるとすることとは別問題である。後者は明らかに幻想であり、そのことから独善性なり、組織日和見主義が生まれるのであり、自己欺瞞に陥らないとしても、例え幻想に忠実であるとすれば、諸雑派解体・吸収の党建設路線に辿りつかざるを得ないのである。

新「怒涛」派の諸君が、再編統合路線に乗り移ってきたのであるが、彼らがその口先とはうらはらに深く毒されているサークル根性を総括し、克服する立場に立つことをあいまいにすれば、新たに統合される組織に多くの害毒をもたらすであろうことを憂慮せずにはいられない。

彼らは、「党的再編統合」＝「マルクス・レーニン主義に立脚した革命党の建設」の率直な願いを共有する用意がある、などと主張すると同時に、「わが委員会と『怒涛』を前進、発展させることこそが、世界革命運動をきりひらき、日本社会主義革命を実現する唯一の道である」などとも主張しているのであり、この後者が彼らの本音である。その決意性、思いこみは字面上見あげるべきであろうが、これこそ主観主義の見本、サークルの自然成長性の上に党を夢みる見本であることを知っている彼らは、プロレタリア階級の単一革命前衛党建設にも一枚かもうとしているのであり、またそれ以上ではないのである。

当然我々は、真面目に積極的に単一革命前衛党建設を志す部分が拡大することを歓迎するのであるが、折衷主義的に接近する部分は批判しなければならないのである。「自力の党建設」（怒涛一七三号）路線の誤りを総括することなく、再編統合路線へ乗り移ることは、いわゆる自然発生性への拝跪、追随主義と何ら本質的に変りなく、その主張は折衷主義とならざるを得ないのである。折衷による統合では連合主義が全面開花するであろうし、その結果は、サークル的混迷の存続か野合と即座の分裂しか生れないであろう。

しかし新「怒涛」派は、労共委の世界党規定（綱領が、例え草案であったにしろ、その組織の綱領である限り、綱領は組織を表現するのだ）に関しては、「独善的、観念的」方針であったと撤回したものの、国内における「独善性」は昔のままであり、再編統合路線への乗り移りで本性を隠そうとしているのである。そもそも、「独善的」であったどうか、といったレベルでの総括では、何も理解しなかったに等しいことを付記しておこう。「独善的」に陥った本質的根源を切開することなく、乗り移りで事足れりとするのだろうか。

「日本の革命党派が」「四分五裂し」、「分散」状態にあることは、各々の諸党派、サークルにおける内部闘争の結果的現象であり、

それなりの歴史的過程、諸背景があったのであるが、彼らはそれらとは無縁な様である。ところで、再編統合の対象とは、具体的実在の諸党派なのだが。労共委内部に対しては、「解党派」の、「調停派」の、更には「サークル主義者」等のレッテル貼りに精を出し、革命戦線からの追放、抹殺に窮々としている彼らにとって、具体的実在の諸党派の評価基準は何なのであろうか。技術的に公表した統合の条件とは、単一党建設を「この指とまれ」式に簡単に考えているのであろう。

一例として、美辞麗句に粉飾された彼らの統合の条件をみてみよう。その第二項には、次の如くある。

「マルクス・レーニン主義の世界観、基本原則を承認すると同時に、毛沢東思想をその革命的継承・創造的発展として支持する点で一致すること。」

「承認」とか「支持」といったあいまいな表現は別として、我々はこの点で一致している。問題は、これを統合の条件として提出している主体である新「怒涛」派の諸君にある。「一致する」とか、統合の条件として受け入れることとは、この場合、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を深く学習し、体得し、実践において体現することを要求するはずである。ましてや、この統合の条件を提出する主体がより強力に要求されることは当然であろう。

そこで新「怒涛」派の諸君にお尋ねするがこの間の労共委内部闘争において誤りを犯さなかったかどうか、以下に示す毛沢東同志の一文に照して身に恥じるところはないのか、と。マルクス・レーニン主義とか毛沢東思想とは、具体的な実践の問題であり、「承認」とか「支持」といったあいまいな表現のもとで、神棚に祭り上げておけば良しとするなら大きな誤りである。

「十大関係について――毛沢東。九、是と非との関係。」

党内でも、党外でも、是と非をはっきりさせなければならない。誤りを犯した人にどう対処するかは、重要な問題である。正しい態度とは、誤りを犯した同志にたいして『前の誤りを後のいましめとし、病をなおして人を救う』という方針をとり、かれらが誤りを改めるよう援助し、かれらがひきつづき革命をやるのを許すことである。

『阿Q正伝』はすぐれた小説である。魯迅はこの小説で、ひとりのおくれた、めざめていない農民を中心に描いている。魯迅はとくに『革命を許さない』という一章を書いて、ニセ毛唐は阿Qが革命をやるのを許さない、と述べている。その実、阿Qがそのとき考えていた革命とは、他の人と同じように、少しばかり品物を手にいれることでしかなかった。だが、こんな革命でもニセ毛唐は許さなかった。

わたしのみるところ、この点では、一部の人は、どうもニセ毛唐によく似ているようだ。かれらは誤りを犯した人が革命するのを許さず、誤りを犯した者と反革命とのけじめをつけず、はては一部の誤りを犯した人をも殺してしまった。われわれはこの教訓を銘記しなければならない。社会において人が革命をやるのを許さないのも、党内において誤りを犯した同志がそれを改めるのを許さないのも、よくないことである。

誤りを犯した同志については、かれらが改めるかどうか観察する必要がある、という人がいる。わたしにいわせれば観察するだけではだめで、かれらが改めるのを援助してやるべきである。つまり、一に観察し、二に援助することである。人間はだれしも援助が必要である。誤りを犯さなかった人にも援助が必

要であるが、誤りを犯した人にはなおさら援助が必要である。およそ人間は、多かれ少なかれ誤りを犯すものであり、誤りを犯さない人間はおそらくいないだろう。誤りを犯せば援助が必要になる。ただ観察するだけでは消極的であり、さまざまな条件をつくって、誤りを改めるよう援助すべきである。

是か非かは、必ずはっきりさせなければならない。なぜなら、党内における原則問題の論争は、社会の階級闘争が党内に反映したものであり、いいかげんにしておくことは許されないからである。状況におうじ、誤りを犯した同志にたい**して、適**度の、実際に即した批判、場合によ**って**は必要な闘争をおこなうのは、正常なことであり、かれらが誤りを改めるよう援助するためである。誤りを犯した同志に援助をあたえないばかりか、人の災を喜ぶ、これこそセクト主義である。

革命についていえば、なんといっても人の多いほうがよい。誤りを犯した人のうちで、誤りに固執し、いくらさとしても改めないごく少数の人を除けば、大多数は改めることができる。ちょど腸チフスにかかると免疫になるようなもので、誤りを犯した人も、そこからよく教訓を汲みとりさえすれば、あまり誤りを犯さずにすむようになる。

かえって、誤りを犯したことのない人のほうが、誤りを犯しやすい。なぜなら、このような人は、とかく、鼻高だかになりがちだからである。誤りを犯した人をせめすぎると、しばしばわが身にはねかえってくるものだということに注意しなければならない。もともと高崗は石を持ちあげて人を打とうとしたのであるが、結果は自分自身を打倒してしまった。

誤りを犯した人に善意をもってあたれば、人心を得ることができ、人と団結することができる。誤りを犯した同志にたいして、いったい、援助する態度をとるのか、敵視する態度をとるのか、これは、その人が善意なのか、悪意なのかを見わける基準となる。

『前の誤りを後のいましめとし、病をなおして人を救う』という方針は、全党を団結させる方針であり、われわれはこの方針を堅持しなければならない。」（北京周報第十五巻第一号より）

わが労共委が、九・一五闘争の敗北を契機にその総括をめぐって右翼日和見主義と「左」翼日和見主義に二極分解した過程で、その前者を代表していった君達が、今、「戦闘的経済主義」の止揚を声高に叫びはじめるとき、まさに「戦闘的」部分のみが問題にされ、その行きつく所は純粋「経済主義」だけである。実際君らの現在は、理論的にはマル戦派に先祖返りし、組織的には「労共委をやり直す」の一語に尽きるのである。

それにしても、四名いた六回大会選出中央委員は一名を残すだけで、それ以外の指導的同志も大方失った現在、君らが「やり直す」べき労共委は、往時のダイナミックな労共委とは裏腹に、新「怒涛」派とならざるを得なかったのは必然であった。

新「怒涛」派は、彼らの悪しき「純化路線」の結果、我々に調停派のレッテルを貼ることに終始し、唯々組織的排除に精を出してきたのである。ここに、悪しき「純化路線」とは、彼らの右翼日和見主義的偏向の理論化、路線化、すなわちその形而上学的純化をさして言うのである。

そのあげく、我々に言及するのに、「旧神奈川県委グループ、いわゆる調停派は、『プロレタリア革命』なる手内職的バクロ文書をネタに、『革命的共産主義者と、その諸党派の革命的党的統合』を空叫びしてみるもののの

清算的自己総括をはなけに、解体・消滅の危機にうろたえている。」とだけとは。我々は別にそのような危機に直面しておらず、うろたえてもいないが、よしんば例えこれが事実であったとしても、この様な対応は、毛沢東同志の言うセクト主義以外の何ものでもないであろう。

まず、調停主義批判の内実とは、調停行為一般を排除するものではないことを断っておこう。調停の労をとるとか、分派を辞せず闘かうとかいうことは結果的現象形態を示しているのにすぎず、その背景にある、ある実践にかかわる政治・思想上の判断の結果である。この判断が正しかったかどうかこそが、問題にされなければならない筈である。

我々においては、当時不充分なものであったことは認めるとしても、七五年綱領論争で提出したSS　　の見解は、労共委がいかに世界党を自称しようとも現実は一国的組織にすぎないこと、この現実の止揚、すなわち世界党の建設は、宣言や自己規定、自称に解決を求めることは組織日和見主義であり、また明らかに国際主義に対する主観主義的誤りを示していることの指摘にとどまるものではなかった。一般に、単一党建設を主張する部分にあって、現在的に、この自称で事足れりとする部分と、一方に、諸党派解体吸収路線と諸党派再編統合路線が形而上学的に二極分解し対立していることの現状認識にもとづいて、これら総体の止揚を課題とすべきことの問題提起であったのである。

諸党派解体・吸収と諸党派再編統合の弁証法的統一による世界単一革命前衛党に至る道筋は、また世界党に限られるはずもなく、日本革命のための単一革命前衛党建設においても貫徹されるはずである。

これこそ我々が、君達と臨中派の調停の労をとる決意をした思想的判定基準であったのであり、現在の日本階級闘争と世界共産主義運動の火中にある我々が「何からはじめるべきか」を日本プロレタリア階級の単一革命前衛党建設に照準を定めたのも、これに帰結するのである。この間の労共委内部闘争にあって、「組織原則」「規約の遵守」のみを唯一の武器とした五中総選出中央委や新「怒涛」派の諸君は、まさに日共の「一枚岩の団結」論に屈服したのであり、先祖返りしたものである。「分裂」や「調停」や「統合」の概念も、その範疇においてしか論じていないのである。

一次ブンドの日共からの分裂、党的登場（未だサークル的混迷の域を脱していないが）を、歴史的に革命的であったとおさえることは、大前提である。そうして日共も現存の組織体ではある。問題は、ある組織がサークルにすぎないのか、党的存在であるか、又、いかなる党的存在であるのか、がすべての基準である。その判断のもとで、内部闘争なり、分裂なり、分派なり、党派闘争なり、また調停なり、統合といったすべての実践がなされるのである。新「怒涛」派の諸君は、第二インターナショナルが第二インターナショナル内分派闘争により結成された歴史的事実を、「組織原則」やら「規約の遵守」だけで説明し、評価し得るとでも考えているのだろうか。

最後に、我々が調停主義のレッテルを載く発端となった党内文書「うなばら三七号」「三八号」を公開し、より多くの同志の批判の手にゆだねることにする。但し、新「怒涛」派の前身である五中総選出中央委が、その保身のために添付したコメントは割愛させて載く。

「うなばら　三七号」　七六・一月　SS

この文書は、M（六回大会中央委）文書No一及びNo二に対する我々の理解と態度を重点

とし、見解とする。No一に関しては、余りの突然の中央委崩壊の現実に当惑しつつも、指導の誤りに気付かれた（臨中及び権力により）中央委が、全く安易に指導を放棄することにより事態の乗り切りを考えた、その点にこそ、委員会（労共委）にとって致命的なものがあると考えた。それは、No二に見られる中央委としての自覚が、破産の認識とともに存在しなかった点についてである。

安易な指導の放棄が、中央委による労共委の私物化と表裏一体の関係にあることに気がついていないのではないか。中央委としての指導性の破産は、個人としての破産に短絡されてはならず、一方、三回大会～六回大会路線の破産を叫ぶことにより正当化（何を？）を目論むに至っては論外である。中央委とは組織内における一機能であり、まして中央集権体制のわが労共委にあっては、全組織を統括する使命を負わされている一機能である。中央委員一人一人の主観にかかわりなく、それ以外ではあり得ないのである。

現在（七六年初め）、「六回大会中央委の分派＝フラクへの屈服」といわれている六回大会中央委の、主観的意図にかかわりなく労共委を解体の危機に陥らせた点についての我々の見解は以上である。要するに、現在の権力からの攻撃は、組織の総力をもってすればハネ返せる問題であり、そうでなければ「革命」も「プロ独樹立」も空語にすぎなかったことになる。権力により潰されるのでもなく、まさに内部要因による自己崩壊こそ我々の最大の敵である。権力を甘くみないことと、過大評価することを混同してはならない。

SSは以上の見解のもと、又、内部情報が非常に少ない現実に規定され、七五・十二月十七日の時点で次の通り確認している。

「中央委の指導の誤りは、労共委総体として克服できるものであるが、指導の放棄に関しては絶対に容認することは出来ない」と。

No二を手にしたのは、七五・十二月二〇日であるが、中央委の破産→臨中への屈服→中総準備委への過程で捨て去った中央委の権威を、今更中総準備委の破産（実質は臨中の破産、分派の中央集権制のもとでの自己矛盾）の宣告主体に破産したはずの中央委をもってきて取り繕ったところで、弁解がましく、No一を各基本組織が受け取ったことをもっての み正当化するしかなかったのである。No一を受け取る以外の、労共委総体の利益になるような積極的方策が、情報ゼロに等しかったSSにとって、七五・十二月十五日の時点で、他にあったのか聞きたい。

労共委総体の利益とは、すなわちプロレタリアートの利益のことであったのではないのか。そしてそれは、世界共産主義革命の達成によってのみ全面的に結実する全革命運動の過程に位置付けされてのみ意味をもつものであったのではないのか。

革命の途上における一同志の戦死を追悼することとは、ブルジョア的に感傷にひたることではない筈だ。そこに誤りがあれば、克服するだけの冷静さが要求され、また、まさに方法・技術に誤りがあろうとも、それを通じて追究されたプロ独樹立のため、失敗を総括し、隊列を整え、闘い続けること、同志が死をとおして追究した内実をまさに実現するために、遺志を受け継ぎ努力することが要求されている筈である。感傷におぼれ、戦士の死を単に美化し、失敗の原因をなすりつけ合うに至っては、追悼どころか冒瀆である。同志の死を教訓化することなく、破産なる言葉を安易に使い、指導性を放棄する清算主義を容認することは絶対にできない。

SSは、No一、No二の六回大会選出中央委の文書に対して上記の批判を行ないつつも、

No二をうけて、東京都委及び神奈川県委が五中総においては、六大中央委の最後の花道としての辞意表明の場としてではなく、中央委を罷免し、新中央委の構築の場にしたいとする方針を承認し、現在（七六年一月）に至っている。

それは、六大中央委の指導の誤りを身近かに感じ得、困難な状況の中で権力の攻撃と取り組んできた臨中（臨時中央委）部分の積極性を一定評価する内容を、一方に内包することを明らかにする必要がある。しかしそれは一方で、臨中が、労共委の置かれている状況を、「組織原則にかまっていられない、一刻を争う状況」と規定し、他方で、中央委に「裏切り者、犯罪者」とのレッテルをはることにより、二重の意味で中央委による「中総」開催を否定した誤りは、単なる手続問題以上の組織問題の本質が含まれている点で、臨中が正当化されるものではない。

それは裏を返せばフラク政治であったし、彼らの戦争路線に労共委を私物化するものであった。彼らにあっては、権力の攻撃に対する対応は全く対策的にしか考えられなかったが故に、「路線の問題」なる解決法が出てきているのである。今日の事態の総体は、まさに組織の問題であった。権力の攻撃に耐えきれる組織からスタートして、直ちに反撃できる組織が要求されているのである。組織を捨象して、非公然化とか、総武装とかを語ってもダメである。綱領・組織・戦術の全体観は、どのように把握されているのであろうか。臨中のでは、まさに、戦術に規定された組織である。それは、一基本組織やフラク政治には意味を持っても、党としての労共委総体に当てはめることは誤りである。

次に問題になるのは、現在の〝M員代理〟で構成される新中央委員会（五中総M）の性格である。六大M文書No一を捨象して、No二のみに依拠し、手続きがふまれているから正統である等の言い分はナンセンスである。

そうであれば、もし一人足りなかったらどうしたのであろう。手続きに関して言えば、まさに薄氷を踏む状態の勝利にすぎない。形式民主主義における真理は多数派の独占物であるが、我々もそれにならい、三回大会以後の中央集権制を、「一人足りない」ということで放り出すことになるのであろうか。

これは党内闘争の問題であり、決して拾収の問題ではないのである。その過程で多数派工作に成功し、かろうじてにしろ手続きを全て踏むことが出来たことは、結果的には勝利を容易にしたことがあったとしても、それ以上の意味をもたせるべきではない。決して、臨中は手続を踏まなかった、俺たちは踏んだといった、矮小な派閥争いではないのである。そうして、正統を自認する者は、決して正統を語らないものである。

問題なのは、臨中フラク政治、六大Mの指導放棄といった労共委の危機にあたり、最大限可能な手続を踏みつつ、内容としての中央集権的組織を守る目的で現在の中央委が成立してきたことの自覚であり、この中央委の内容の確認にもとづく全会員の承認のもとでの労共委の活動の始動であり、権力に対する反撃である。単なる拾収として手続だけを整えたのでは絶対にないこと、それだけに今後の労共委の活動に対する新中央委の全面的な方針の提起と、新中央委の主体からする六回大会から七五・十二月三十一日までの中央委（六大M）の総括が今問われているのである。

要するに、単に「正統」のみを叫び、「継承」のみを語ることにより、事実を曖昧にしないで欲しい、ということです。「分派」などのレッテル貼りや、処分を安易に行うことにより、本質論議を避けた、事態の清算が

行なわれてはいないだろうか。すべて我々の内部にあらわれた矛盾である。清算主義は、同様の事態の再現の危機を持ちつづけるであろう。

又、臨中部分に分派のレッテルを貼ったまま突きはなしておくことは、安易な処分以上に解決の道を閉ざしたものであり、早く復帰の条件として「自己批判と処分に服すること」を提示し、隊列に呼び戻す必要を感じている。除名に該当するはずもなく、活動に積極的なるが故に誤りを犯した同志を、去るでもなく、戻るでもない状態にしておく様な陰険な処分法は、我々の規約にはない筈である。

以上の見解に立って、SSは、次の四点を当面の労共委の主要な活動とすべきことを提起します。第一に、三回大会以後の活動総括。第二に、中央集権制の内実を明確にすること。第三に、綱領論争の活動を継続し、深化させること。第四に、出来る限り早期に大会を開催すること。以上である。

「うなばら　三八号」七六・三・三一。
山崎浩一。

現在わがS（当時の怒涛編集部員から成る細胞）では、「文書通信No二」（五中総中央委党内文書No二）の評価をめぐって意見が対立し、S内討論そのものがもはや先に進むことができず、S活動そのものが危機に頻している。

「文書通信No二に対する意見の統一がない限り、S活動はあり得ない」とする側の「文書通信No二」に対する評価は、「時宜にかなった適切なものであり、新中央委は革命的に中央集権制を体現しており、更には妥当にもプロレタリア民主主義を貫徹しており、全面的に支持すべき内容である。よって、これに対する一切の批判を持つものを容認することはできない」とするものである。

これに対置された批判的評価とは、私の意見であり、結局この対立は、S内で結着をつけることが不可能となり、ここに公開して全党的論争の素材とすべきである、とS決議がなされた。「文書通信No二」を、それに対する評価を踏み絵として、現在的に批判を封じつつ、整風を行なっていく様な作風を、私としても是認できるものでもなく、納得がいかない限り踏み絵を踏まないのは当然であり、全党の判断を得たいと考えます。

私の発想の前提は「うなばら三七号（SS）」の内容であり、しかしその中で、「中央集権制のもとでは〝フラク〟なる言葉は分派以外の何ものでもない」とする見解に関しては、次の通り自己批判し、訂正するものです。すなわち、〝党内闘争〟という党内民主主義（民主主義的中央集権制）の方法に関する思想への接近は、党内多数派と意見を異にする部分の存在を前提し、多数・少数なる概念は固定的に把えてはならず、「党内闘争によって党内の意見の相違を克服することは、党発展の法則」（レーニン）であり、その過程でフラクが形成されるのであり、すべては現実を前提としなければならないことの認識であった。

中央集権制のもとでは、フラクションは、その存在はあり得ないとすることは、教条的発想であったし、旧六大Mの破産を目のあたりにしてきた我々は、中央委員会のもとにおける統一体としての中央集権的組織の在り方に対してもメスを加えなければならず、「総括第一報告」にあるような怒涛一一四号、一三〇号に対する批判は、結果論的に批判していくのではなくして、問題があれば即対応的に反論し、組織実践に反映させていくのでなければならなかったはずである。

労共委が、その組織的限界性として内包し

ていた矛盾の外化としてフラクが登場してきていることを真剣に考えるべきである。連合主義批判は、単に裏返されたものとしてのものになってしまってはいなかったろうか。党の一枚岩的内実を未だ主観的願望からのみ追求し、規約の単なる形式的、法律家的運用にのみ置きかえようとしてきたことの限界性は、真の党員間の信頼関係とはうらはらに、形式的中央集権制に堕していたし、中央委による労共委の私物化と表裏の関係にある、中央委の指導の放棄を生み出してきたのである。

また会員総体は、議会制民主主義の如き代行主義的に中央委の存在を理解してきてしまってはいなかったろうか。またそれ故に、大会と大会との間の、かなり長期にわたる期間をその様にみてきてはいなかったろうか。そうして、その中央委が破産し、頭が吹き飛んだ中央集権体制の混乱を目のあたりにしてきた筈だし、簡単な修繕や小手先の技術では、再度、再々度の破綻を準備するだけになってしまうのではなかろうか。我々の組織の最高権威は大会であったはずだし、六回大会ではすでに、可成りこの大会が空洞化していなかったろうか。今すぐに、大会のもつ意味を再点検し、強固な民主主義的中央集権制を再構築する必要があり、そこにおいてこそ、党の非公然化、非合法活動の貫徹が、単なる技術に限定されることなく、綱領・組織・戦術の総体として実現し得るであろう。

主観的願望の域を出ていないにしろ「党の一枚岩的存在」を語る場合、「行動の統一」が語られているのであり、例え意見が異なろうとも最低限協同して革命事業を行なうことが前提となるのであり、「少数は多数に従う」とはこれ以上の意味を持たせてはならない。そして「行動の統一」は、M方針が一定の限界性を持ちつゝも、全党的に受け入れられるだけの内容が含まれていることが一方で要求されるであろう。それは、党内闘争が存在する中で遂行されるのが常であり、単に中央委（M）方針を神格化し、忠誠を誓わせる中でしか「行動の統一」が、しかも一切の批判を封じこめる中でしか勝ち取ることができないとしたら、それはM方針、又はMの無指導にこそ問題の根源を求めるべきであろう。

この様な現実の中で、しかし一方、大会毎に中央委員が交代し、委員会（労共委）の方向性が常にジグザグしているようでは、またピンチである。真剣に党内民主主義（それは意見の相違を鮮明にし、全党的に公開することであり、しかし具体的事実よりは理論的、又は路線的内容を公開討論に付す、ということ）を貫徹しつつ、党内闘争の試練にかけられつつ、早期に確固とした、党内活動の継承性を保証する、それ故に当然発展前進する内実を獲得した恒常的党中央（当然非公然の）を確立しない限り、「党の一枚岩」は主観的願望の域を脱け出すことは不可能であり、革命はそれだけ余計な手間ひまを必要とし、犠牲を大きくするであろう。

一方では、党内闘争が、ソ共の様に、多数派の独占的手段として、少数派の抹殺、党官僚の反対派弾圧の手段として使われ　まう危険についてもおさえておかなければならない。毛沢東の「人民内部の矛盾をどう処理するのか」に学ぶべき点が多くあるのではないだろうか。

現在第七回大会が目指されているものと思うが、この大会こそ、まさに革命的統一のもと、一歩前進を保障し得るものとして勝ち取られなければならない。しかるに、新中央委は、中央委活動をもって一方では旧六大M、又は臨中部分にその意見の公開を不可能のままにしておいて（復帰命令等の形式的技術では不可能である事に変りはない）、悪くとれ

ば中央委の権威を利用しつつ七回大会に向けた多数派工作を新中央委のみが行なっていること、又新中央委は結果的にはこれにのみ専念していること、その手法に疑問をもつのが当然である。そうしてその結果、七回大会は全党大会ではなくして、新中央委大会になってしまうであろうことを憂慮する。

以下、私がS内で、「文書通信№二」の評価として提出した意見を示し、全党の判断を得たいと考えます。

昨年（七五年）の九月以来、とりわけ十二月初旬以来の事態の中で、新中央委及びそれを推してきた部分の、臨中部分に対する中央集権的手続に関する優位性は、まさに五中総の成立、新中央委の誕生により、確立されてきたはずであった。それ故に、否それだからこそ、新中央委のやるべきことは、「優位性」なる相対的な位置に常に身をおきこの「優位性」の防衛にあくせくすることではなく、まさに党中央としての発想であり、指導であった。

しかし、臨中の延長としてある臨中中央委からするオルグ工作に対して、当初は口頭により「面会拒絶」をしながら結局は野放しにせざるを得ず、今回の「指示№三」による「会う時は、事前事後の報告と上級の承認を得ること」にまで後退せざるを得なかったいきさつをこそ総括すべきであろう。すべて、党内闘争の技術というよりは思想性の欠如が災して、相方により悪循環が繰り返されているのである。

結局現在は（五中総開催にもかかわらず）、昨年（七五年）暮の事態の延長上に未だあり、極端にいえば二つの中央委が存在する状態と見ざるを得ない。「文書通信№二」はその中で泥仕合を演じているのに過ぎない。相対的「優位性」は、相対なるが故に、、余り叫びすぎると、しかもそれのみを叫びすぎると、反対物に転化してしまうであろう。

旧六大中央委の崩壊を目のあたりにしたわれわれは、新中央委に対する信頼を、又は中央委としての権威をどのように考えるべきなのであろうか。臨中に相対された手続に関する優位性だけでは、余りにもピンチである。新中央委が、再度の党中央崩壊を演じないという客観的保証は、新中央委員一人一人の自覚と決意以外、何も見当らないのである。そして誰でもスタート時には、何らかの決意ぐらい持っているものだ。問題は、それが、何らかの事態の中で座礁した場合、試練にかけられた時にこそあるのだ。

又、労共委の継承性は、規約の法律家的運用に矮小化されてはならず、旧六回大会中央委がいきづまった点は、それを否定的に総括することにより反面教師として、必らず、継承性のみか一歩前進できる内容が含まれているはずである。臨中部分は左翼日和見主義に迷いこんでしまったものと思われるが、今それ故をのみもって彼らを失うとしたならば、むしろ総体の右傾化の危険もあり、そのことの方を問題にしない限り労共委の破産につながるであろう。

われわれは、誤りを自己批判し、克服する勇気をもつ者は、特に経験豊かな古くからの会員を、もっと大切にするべきであり、何としても生かす道を常に追究する必要がある。指導者として先頭に立って否応なく積極的に実践活動をしてきたからこそ誤りも明らかに目につくのであり、まだ誤りが目立たない新人に新陳代謝され、常に手工業性へ逆行するようなことは誤りである。意図的利敵行為でない限り、責任の押しつけ合いではなく、全党員全体で克服すべきものとして考えていくべきである。

要するに、もし七五年九月段階で臨中が手

続を踏んで多数を得たならば（単なる仮定でなく、その可能性は高かったはずだ）どう対応したのか、等も含め、新中央委に問われていたことは、まさに党中央として、例え誤りを犯したといえ、いや尚更のことこれ以上の誤ちを積み重ねさせない方向で、臨中部分をさえ包摂し切れるかどうかであったのだ。ましてや中間派を固定させないことが問われていたのである。こと現在に至っては、新中央委も今少し譲歩すべきであり、六中総を改めて準備するなりして臨中部分と合同して協議し、七回大会を全党レベルで成立させるために全力をあげるべきである。

現在労共委がおかれている状況は、金銭的にも、更には対権力の点でも、大会開催を非常に困難なものにしている。しかし、この困難を除去する道は、大会以外にはないであろう。現在の党内事情は、それ以上の困難性を労共委にもたらしているのである。現在の弾圧をはね返し、労共委を更に発展させる為には、全会員の積極的な活動を導きだせるかどうかにすべてがかかっているのである。

「文書通信№二」に対する意見によって整風を推し進めるような締めつけ政治は、決して良い結果をもたらさないであろう。中間派をどうするかとは、二者択一をせまる問題では決してない。

一方、臨中側も、五中総開催から新中央委の登場に対抗して、臨中の大前提であった「旧六大Mの手になる中総開催は有り得ない」とする思想をかなぐり捨て、I・H同志を使った手続のデッチあげは、もはや余りの不様さで開いた口がふさがらない。少なくとも、誤りであろうとも真剣に一つの方向性をもった思想は、そう安易に捨て去るものではなく、本質的な自己批判がない限りは貫徹してもらいたかった。新中央委が手続を全て踏んで正統を名乗ったことにあわてて、手続問題にのみ目を奪われて行なった今回の臨中Mの登場の演出は、弁解の仕様もなくみじめなものであった。もっとも、泥仕合とは皆この様なものでしかあり得ないのであろう。早くこの様なことは切り上げて、恥の上塗りをしない内に、党内闘争の枠に戻るべきである。その上で、自からが最も主張したかったことを主張し、七回大会へ向け多数派工作を行ない、実現を、全党的実現を目指すべきである。

次に「文書通信№二」に関し、目についた点を若干書いておく。（一部抜粋）

(四) 「積極的なるが故に誤りに引きこまれている諸君を多く含んでいる・・・」

SSの「うなばら三七号」にある、「活動に積極的なるが故に誤りを犯した同志」との内容との異同は？　また誤りに引きこんだ犯罪者は？

新中央委の目的は、分派の分断である。これは党内闘争を確立してからやるべきであり、しかも内容で勝負するべきである。復帰させるから臨中指導者に離反して来い、というような姑息な手法をわれわれは嫌悪する。その様にして復帰した者を誰が信頼できるのだ。しかし、わざわざ「引きこまれている」などと書き直している点に、明白ではないか。

(七) 「中央集権制の復権」を叫ぶよりは、「労共委の中央集権制の内実化、確立」とでも叫ぶべきであり、七五年九―十二月の事態の中で露呈した、わが中央集権制のもろさをこそ総括すべきである。「復権」なる発想は労共委内部では誤りである。反動的秩序派。

以上が、現在の神奈川県委員会に至る我々の初期の見解であり、未だ粗く、思想的にも学習面でも未熟ではあったとしても、現在もその立脚点としている点であり、現在の単一革命前衛党建設の主張へと一貫している点で

もある。

新「怒涛」派の諸君が、日本革命、ひいては世界共産主義運動の勝利を目指す諸党派の再編統合による単一革命前衛党建設の潮流に接近を試みはじめたことを、やはり我々は歓迎すべきであると考える。そのためにも我々は真剣に論争していくであろう。理論的内容に踏みこんだ批判は、彼らの共産主義革命七号（ほとんど新怒涛紙で公表されたものだが）を手にしてから展開することにする。特に彼らの清算主義的自己総括の批判は重要、かつ緊要なものとなるであろう。

新「怒涛」派の諸君が、労共委が二極分解したこと、その一方を形而上学的に固定し、路線化したことの誤りを真剣に自己批判し、総括し抜く中に、真に革命的な潮流の主体に突き進むことを期待しつつ。

労働者共産主義委員会の総括　（その三）

国際主義に立脚し、プロレタリア革命に勝利しよう!!

〔1〕

われわれ、労共委神奈川県委員会は、「プロレタリア革命」第一号において、「この間の労共委内部闘争、分裂は、組織の問題として九・一五闘争の失敗を直接的契機としているとともに、また、労共委の綱領・組織・戦術の、総体における主観主義的誤りを、その内部要因として生起してきた」ことを認め、一九七五年前半に闘われた我々の綱領論争の経過とその内容を報告してきた。

今回はわれわれの、この綱領論争に関する現在的な見解を、諸見解に対する評価、批判として提出し、多くの同志の批判を希望するとともに、日本プロレタリア階級の単一革命前衛党建設の一助に供していきたいと考えます。

まず押えておかなければならないことは、第三インターナショナル（共産主義インターナショナル）の成立は一九一九年三月であり、一方第二インターナショナルは、その社会排外主義ゆえに革命の桎梏物に転化し、すでに一九一四年第一次世界帝国主義戦争がはじまるとすぐに数日にして崩壊したのであり、このような中で一九一七年の十月ロシア革命は勝利したのである、ということである。

つまり、社会排外主義に転落した第二インターナショナル部分の敵対のもとで、第三インターナショナルの創設とロシア革命の勝利は、同時的に進展したのである。「世界党」一般が、プロレタリア革命の特効薬ではないこと、自らの民族的任務と国際主義的任務とを統一した、レーニンの率いるボルシェヴィキの闘いこそが、十月ロシア革命の成功をも、また第三インターナショナルの創設をも導きだしたのである。

このボルシェヴィキの闘いにおいて、強力な理論的武器となったものは、レーニンの帝国主義論であり、とりわけ「不均等発展の法則」であった。

これによりレーニンは、それまでの「先進資本主義国のすべてでプロレタリア革命が同時に勝利することによってのみ社会主義の勝利が可能である」という公式を退りぞけ、「社会主義の勝利は、はじめは少数の資本主義国で、あるいはただ一つの資本主義国ででも可能である」ことを論証し、十月革命の勝利によってそれを実証したのである。

それは更に、毛沢東のプロレタリア党（共産党）の指導とプロレタリアートのヘゲモニーの思想により、「資本主義国で」との限定条件も取り除かれ、中国の人民民主主義革命→プロレタリア独裁の過程で実証されてきている。

「経済的および政治的発展の不均等性は、資本主義の無条件的な法則である。ここからして、社会主義の勝利は、はじめは少数の資本主義国で、あるいはただ一つの資本主義国ででも可能である、という結論が出てくる。

この国の勝利したプロレタリアートは、資本家を収奪し、自国に社会主義的生産を組織したのち、他の資本主義世界にたいして立ちあがり、他の国々の被抑圧階級を自分のほうに引きつけ、それらの国内で資本家にたいする蜂起をおこし、必要なばあいには、武力に訴えても搾取階級とその国家に反対して行動するであろう。

プロレタリアートがブルジョアジーを打倒して勝利を獲得するばあいの社会の政治形態は、民主的共和制であろうが、この民主的共和制は、まだ社会主義に移行していない諸国家にたいする闘争のなかで、当該民族または諸民族のプロレタリアートの力をますます集中していくであろう。

被抑圧階級の独裁、プロレタリアートの独裁がなければ、階級を廃絶することは不可能である。もろもろの社会主義共和国が、おくれた諸国家にたいして、多かれすくなかれ長期にわたってねばりづよく闘わなければ、社会主義のもとでの諸民族の自由な連合は不可能である。」（レーニン全集二一巻三一一頁『ヨーロッパ合衆国のスローガンについて』一九一五年）

ここでわれわれは、労共委の「世界革命、世界プロ独、世界党」について検討してみなければならない。

まずここには、反スタ・トロッキズムの一国主義批判が潜入していることを、われわれは見る。ソヴェト共産党の「階級闘争消滅論」の謬論を批判するのに、トロッキーの「一国社会主義不可能論」に依拠しているのである。それによってレーニンの「一国社会主義建設可能論」をも否定しているのである。そこから往時の「世界同時革命論」へ先祖返りするには、わずかの道のりでしかなかった。

「階級闘争消滅論」とは、いうなれば「一国共産主義可能論」であり、レーニンの主張とは根本的に異なるものである。レーニンの主張である「一国における社会主義の勝利」とは、一国におけるプロレタリア革命の勝利であり、一国におけるプロレタリア独裁の樹立であり、そのもとにおける一国内での社会主義建設の可能性であった。

またレーニンは、「プロレタリア階級独裁は、階級闘争の終りをさすのではなく、新しい形態における階級闘争の継続である」とも指摘しており、これは毛沢東により、「継続革命論」として定式化されたものである。

日共の社会排外主義への転落、日和見主義、改良主義、修正主義への転落に対置された反スタ・トロッキズムの「一国主

義批判」とは、「世界同時革命」の空想的戦略に辿りつかざるを得なかった。この「一国主義批判」が、トロッキーの生産力論の謬論に裏付けられた「一国社会主義不可能論」（具体的には農民の歴史的役割の全否定として表現される）に立脚したものではないと主張もされたとしても、一国と世界の形而上学的対立観の混乱におちこんでいることにかわりはない。

「世界社会主義共和国連邦というが如き、単一のプロ独国家を否定する見解」（共産主義革命一号）等に示されている労共委の「世界プロ独」の主張には、必然的に一国におけるプロ独の否定が含まれ、また、労共委の「世界プロレタリア革命」のスローガンにかかわりなく、「世界同時革命論」が内包されざるを得ないのである。

ロシア革命以後の世界が、世界共産主義革命の時代に突入したこと、その時代は世界プロレタリア革命の勝利において完成すること、この事実に疑問の余地はない。しかし、今われわれが問題にしなければならないことは、この歴史的背景における、世界プロレタリア革命に至る道筋である。すなわち戦術であり、路線の勝利である。

プロレタリア革命の終極目標は、共産主義世界の達成であり、それは一切の階級と一切の国境の廃止を前提とするのであり、それ故にプロレタリアートの変革対象は全世界でなければならない。しかしわれわれは、観念論者ではもとよりなく、空想的社会主義者でも、無政府主義者でもないのである。マルクス・レーニン主義に確固として立脚して進むことが今問われているのである。

しかし我が労共委は、その「世界同時革命」、「世界プロ独」に逆規定されたものとして、「わが党が国際主義に忠実であるためには、わが党の組織の一国的性格を突破することこそ必要である」として、主観主義的に突走りはじめたのであった。

それは、三回大会の世界党組織化方針となり、更に四回大会の「地域・民族・国籍を問わず全世界に委員会組織を建設していく」方針に進み、五回、六回大会で手直ししつゝ、七五年綱領論争の結果、六回大会選出中央委員会（六大M）のD六－二四「綱領の形式をめぐる問題についてのMの態度」（プロレタリア革命一号六五－九〇頁参照）に辿りついたところで九・一五闘争の失敗が立ちはだかったのである。

ここでわれわれは、この六大M見解を批判しておきたい。

まず六大Mは、綱領論争の一知半解な理解のもと、D六－二四を提出し、六大Mに自覚のあるなしにかかわらず、中央委の権威により、綱領論争の更なる展開、深化を阻害し、結果としてそれを握りつぶしてしまったのである。ここに権威とは、

官僚主義的権威を言っているのではなく、Mに中央委としての自覚が欠如していたことを指して表現しているのである。

この結果は、七五年八月末の第四回中央委員会総会における六大Mの孤立を現出せしめたのであった。F－三四ふSや、F－四六ヒノキS（プロレタリア革命一号参照）の主張が、労共委の、少なくとも当時までの代表的な意見であったこと、これらの見解のもとで六回大会で六大Mが中央委に選出されていること、それ故に、このD－六－二四は、綱領論争紙であったFシリーズの一つの意見として提出されてしかるべきであったのである。

六大Mは結着をなぜ急いだのか、そのための大会をなぜ急いだのか、疑問は残されたまゝである。第七回大会は、もっと総体的な内実をもったものとして準備されるべきであったし、大会一般とはその様に扱われない限り中央集権制の内実そのものが崩れてしまうのは必然であろう。

D六－二四で六大Mは、第三回大会以降の「世界－日本」をめぐる委員会の組織性格にかかわる論争と、三回大会以降の綱領の形式をめぐる論争を総括し、「日本革命に責任を負い、国際共産主義運動の革命的団結のために闘う労共委の綱領を獲得しよう」と主張している。

この主張の冒頭で、「われわれは第三回大会において、世界党の建設は口先だけでなく、実際に自らの活動を通して実現することを決定した。世界革命、世界プロ独を口先では承認しつつも実際にそれを実現する保証としての国際的な共産主義者の団結のために闘うことを日本の戦闘的左翼がおしなべて放棄している中で、労共委が実践的にかかる方向をとることを決定し、活動を開始したことはまさしく革命的意義を有するものであった」と自己評価している。

現在のわれわれも、プロレタリア革命の終極目標が共産主義世界の実現であり、その為には世界党が不可欠であることを否定するものではない。しかしここに問題とすべきことは、世界同時革命論、世界プロ独論の誤った路線に規定されて、世界党の建設を自己の当面の最高の任務と規定したことなのである。「何からはじめるべきか」という問題は確かに重要なことである。このことの自覚の存否にかかわりなく、労共委は確かに、当面の最高の任務を「世界党建設」においていたのである。

この根本的な路線的誤りである反スタ・トッキズムの「一国主義批判」を不問に付したままで、六大Mは次のように主張しはじめるのである。

「世界の各国でコミンテルン支部のなかったところはそれほど多くはない。仮にコミンテルン支部が存在していなかった

としても、社会主義的、共産主義的結社がつくられてきているであろうことは言うまでもない。それぞれの国に革命運動の歴史があり、そこには多かれ少なかれ、共産主義的組織、分派が存在しているだろうことを無視して労共委組織を日本以外の国に建設していくという方針は一般的なものたりえなかったのである。」（D－六－二四）

当然その論拠ゆえに、民族主義への屈服として批判を浴びた、主観主義・経験主義にもとづくこの六大Mの総括から、次に示すレーニンの問題の立て方までには、余りにも遠い隔たりがあるのであった。

「ともあれ、革命的な社会民主主義的分子は多くの国々にいる。

これらのマルクス主義分子を――最初はどんなに少数であろうとも――結集すること、彼らの名において今日わすれられている真の社会主義の言葉を大衆に思いださせること、すべての国の労働者にむかって、排外主義者と手を切って古くからのマルクス主義の旗のもとにあつまるよう呼びかけること、――これこそが当面の任務である。

真の行動綱領であるのは、おこった事がらについて大衆に完全で明瞭な解答をあたえ、帝国主義とはなにか、それとどうたたかうべきかを説明し、第二インタナショナルの崩壊をもたらしたものが日和見主義であることを公然と言明し、日和見主義者をのぞき、彼らに対して、マルクス主義的インタナショナルを建設するように公然と呼びかける、マルクス主義的な綱領だけであろう。

国際的なマルクス主義的組織を実現するためには、まずさまざまな国に独立のマルクス主義党をつくりだす用意が必要であることはまったくいうまでもない。

新しいマルクス主義的インタナショナルをつくりだす条件が、すでに成熟しているかどうかは、遠からぬ将来にわかるだろう。もしそれが成熟しているとすれば、わが党は、日和見主義と排外主義を清掃した、そういう第三インタナショナルに喜んで加入するだろう。

もしその条件が成熟していないなら、それは、この清掃をおこなうためには、まだ多少とも長期間にわたる進化が必要だということを示すものであろう。そのばあいには、わが党は、――革命的マルクス主義の基盤に立つ国際労働者協会の土台が、さまざまな国にできあがるまでは――いままでのインターナショナルの内部で、最左翼の反対派となるであろう。」

（レーニン全集二一巻「社会主義と戦争」）

しかし六大Mは、前記の総括に立脚して、①「同じ共産主義者だとしても諸民族が抑圧民族と被抑圧民族に分裂している現状にあっては、そのままある国の共産主義者に他国の共産主義者がとってかわることができないこと」、②「あらゆる国には、その国の共産主義運動の歴史があり、多かれ少なかれ、マルクス・レーニン主義の原則に立脚し、自国の革命運動を革命的にすすめようとしている組織が存在しており、その国の歴史を無視して、外から労共委の組織建設をもち込むことは、継承性をなくすることになることを明確にふまえなければならない」として、③「労共委の現状を肯定的にとらえるとともに、発展していく方向を示さねばならない」と居直ったのであった（以上引用はすべて「D－六－二四」）

その上で次のように主張している。

「現在の労共委が、日本国籍をもつ日本人、沖縄人によって組織されているという現実に立脚し、日本の労働者階級の政党として日本革命に責任を負うこと、及び、国際共産主義運動の革命的伝統を継承していく革命的潮流の強化、統一、共同と共産主義者の国際的組織形成のために闘うことである。」と。

この主張は、民族主義、民族共産主義への完全な屈服であった。この主張の帰結は、七六年夏の、五中総M（「プロレタリア革命」準備号、1号参照）の手による、沖縄細胞の独立承認、沖縄人民革命党の結成承認となったのである。これは、個別民族国家への世界細分化を主張する民族主義の極致である。民族問題の解決に関する思想の不毛性を余りにも露骨に露呈したものであった。民族と国家を混同するといった初歩的な誤りであったと弁解するのであろうか。ここに国際主義など存在し得ようか。

現在全世界的に、ブルジョアジーの帝国主義、民族主義・排外主義に対するに、社会帝国主義、社会排外主義、社会民族主義、そうして社会平和主義から民族共産主義へ至る傾向が主たる潮流である現実に抗して、マルクス・レーニン主義の旗を高々と掲げ、マルクス・レーニン主義に確固として立脚し、真に国際主義的な潮流の形成、新しいインターナショナルの結成を呼びかけていくことこそ、当面の任務でなければならない。

そうして、その呼びかけ主体の資格というか、その内実がここに問われるのである。その民族的任務において、真に国際主義的な路線のもとで、立派に日本プロレタリア革命を領導するとともに、国際共産主義運動の利益に奉仕しているかどうかこそ、この資格における試金石なのである。

組織内部の政治的分散性をボヤキつゝ、その本質的原因を究めることなく、九・一五闘争の唯一回の攻撃の失敗だけで組

織がもたない現実、その根本的内因に目を向けることなく、その後種々の政治的色合いが鮮明になる過程に対処すべき能力をもたず、ただいたずらに四分五裂し、崩壊していった組織を、いかにそれが世界党を自称しようとも、日本の革命政党を自称しようとも、誰も信頼しないであろうことは自明である。

六大Mは、労共委の現実を「肯定的」に見る、などといっているが、これこそ形而上学的対立観の露呈であって、世界――一国に関する混乱と本質的には同じである。「肯定的に見る」とは、その後の労共委の分裂に際して、その日和見主義的部分を代表していったことと関連して、その保守的体質を見事に表現はしているが。

肯定と否定とは、対立物の両側面であり、その統一として弁証法にいう発展の法則があるのである。また世界――一国の形而上学的対立観は、本来無政府主義者のイデオロギーであり、それに対置されたものとして、マルクス主義の国際主義があるのである。

六大Mの主張から、旧マル戦への先祖返りまでは、わずかの道のりでしかなかったし、まさに新「怒濤」派が現在それを忠実に表現しているのである。

われわれは、労共委十年間の苦闘が、それがよし反面教師としてであったとしても、その成果を立派に受け継ぎ、理論的には一歩も後退することなく前進していくであろう。特に、この苦闘における国際主義的教訓は、余りにも貴重なものであった。

われわれは現在、「われわれが、世界中の共産主義革命組織や民族解放闘争組織との連帯を表明するだけで、日米帝国主義者の抑圧的侵略的対外行動に打撃をくらわすばかりでなく日本革命を実現することによって米帝を日本からたたき出し、日帝を打倒することのために闘い抜くことがなければ、国際主義的責務を立派にはたしていると言うことはできない」（「プロレタリア革命」一号四六頁）ことを確認し、日本革命のために闘うことは、われわれの第一級の国際主義的責務であることを確信している。

われわれは、世界――一国の形而上学的対立観（――→コスモポリタニズム）や、反スタ・トロッキズムの一国主義批判にもとづいて、世界党を自称したり、ないしは一切の媒介もなく一挙的に世界党を作ろうとする路線からは明確に訣別し、真に国際主義的な潮流の世界的な形成を促し、新しい、真にマルクス・レーニン主義的なインターナショナルの結成を呼びか

けるために努力しなければならない。
そのためには、真に国際主義的な路線のもとで、立派に日本革命を領導し、もって国際共産主義運動の前進に寄与すべき現実の具体的活動こそが必要なのであることを、われわれは確認してきている。

（資料）

『2』

国際主義について

レーニン

ここでいちじるしく特徴的なことは、わが主観主義哲学者が空語から具体的な事実的指摘へうつろうとこころみたとたんに、水たまりにはまってしまったことである。そして彼はあきらかに、自分がこの、あまりきれいではない立場にいることをよく感じている。彼は腰をおろして、身をととのえて、そして、あたりにドブ泥をはねかける。

たとえば彼は、歴史とは階級闘争の挿話の系列である、という命題を反論しようと欲する。そこで彼はこう述べる。『マルクスの創設した国際労働者協会は、階級闘争を目的として組織されたものであったが、フランスとドイツの労働者が相互に殺しあい、滅ぼしあうことを阻止しえなかった』、とそして、このことによって唯物論は『民族的利己心や民族的憎悪心の悪霊』に結着をつけることができなかったということが証明される、と。

このような主張は、商工業ブルジョアジーのきわめて現実的な利益がこの憎悪心の主要な根拠をなしていること、および、民族的感情を自立的な要因として説くことは問題の本質をぬりつぶすものにすぎないことについての、この批評家のもっとも粗雑な無理解のほどを示すものである。

ミハイロコスキー氏は、インタナショナルにたいしては、純然たるブレーニン流の皮肉をもってのぞむよりほかに道を知らない。『マルクスは、なるほど崩壊はしたが、なお復活するはずの国際労働者協会の首領である』と。もちろん、もし

『公正な』交換制度をもって国際的連帯性の極限と考えるなら、また、もし交換は、公正なものも不公正なものも、つねにブルジョアジーの支配を予想し内包するものであり、交換に基礎をおく経済組織を廃絶しないかぎり、国際的衝突の停止は不可能であることを理解しないなら、インタナショナルにたいして冷笑的態度しかとれないのも当然である。

また、それならば、民族的憎悪心にたいする闘争手段としては、おのおのの国で抑圧者の階級との闘争のために被抑圧者の階級を組織し結束させること、そして国際資本との闘争のために、このような国民的な労働者組織を一つの国際的労働者軍に結合すること以外には、他の手段はない、という単純な真理をミハイロフスキー氏がけっして理解しないのも当然である。インタナショナルが労働者の相互殺りくを阻止しえなかったことについていえば、ミハイロフスキー氏は、パリ・コンミューンの事件をおもいだせば十分であって、この事件は、戦争をおこなった支配階級にたいする、組織されたプロレタリアートの真実の態度をしめしたものである。」（レーニン全集一巻一三八～一三九頁「『人民の友』とはなにか」一八九四年）

「プロレタリアートの国際的な革命運動は、さまざまな国々で、均等に、おなじ形をとってすすむものではなく、またすすむはずもない。あらゆる活動部面でのあらゆる可能性は、種々の国々の労働者の階級闘争の総和としてしか、完全に、全面的に利用されるものではない。それぞれの国は、自己の貴重な独創的な特徴を共同の流れのなかへ持ちこむが、しかし個々の国では、運動はなんらかの一面性、個々の社会主義政党のなんらかの理論上または実践上の欠陥をもっている。全体としてわれわれは、国際社会主義運動の巨大な前進を、敵との幾度もの具体的な衝突を通じて、プロレタリアートの幾百万の軍隊が結集しているのを、ブルジョアジーとの断固たる闘争――プロレタリアの最近の一大蜂起であるコンミューンのときよりも、労働者階級の準備が幾層倍もととのった闘争――の接近を、はっきり見うける。

そして国際社会主義運動全体のこの前進は、アジアの革命的＝民主主義闘争の激化とならんで、ロシア革命を特殊な、しかもとくに困難な条件のもとにおいている。ロシアは、ヨーロッパでも、アジアでも、偉大な国際的同盟軍をもっているが、しかしそれとともに、まさにそれだからこそ、ただ民族的な、すなわちロシア国内の敵だけでなく、国際的な敵ももっている。プロレタリアートの闘争の強化に対する反動は、あらゆる資本主義国で不可避的であり、しかもこの反動は、アジアとヨーロッパ、とくにヨーロッパにおける人民運動、あらゆる革命に対抗するために、全世界のブルジョア政府を結束させつ

つある。

わが党内の日和見主義者は、ロシアの自由主義的インテリゲンツィアの大多数とおなじように、こんにちまで、ブルジョアジーを『つきのけず』、彼らをこわがらせず、『過度』の反動を生みださず、革命的階級による権力奪取をもたらさないような、そういうロシアのブルジョア革命を夢想している。はかない望みだ！俗物的な空想だ！可燃材料は、世界のあらゆる先進諸国家できわめて急速に増大しつつあり、火の手は、きのうまではまだ深い眠りにおちいっていたアジアの大多数の国家に、きわめてはっきりと飛び火しつつあるので、国家的ブルジョア反動の強化と、あらゆる個々の民族の革命の激化とは、絶対に避けることができない。

ロシアの反革命は、わが革命の歴史的任務をはたしていないし、またはたすこともできない。ロシアのブルジョアジーは、国際的な反プロレタリア的、反民主主義的潮流のほうへ、不可避的に、ますますつよくひかれていく。ロシアのプロレタリアートは、自由主義的同盟者に期待をかけてはならない。ロシアのプロレタリアートは、農民大衆自身によるロシアの農業問題の暴力的解決の必然性に依拠し、彼らが黒百人組的地主と黒百人組的専制の支配をうちたおすのをたすけ、ロシアにおけるプロレタリアートと農民の民主主義的独裁を自己の任務としながら、そして、ロシア・プロレタリアートの闘争と勝利が国際革命運動と不可分にむすびついていることをわすれずに、革命の完全な勝利へむかって、自主的に、自分の道をすすまなければならない。反革命的な（ロシアでも全世界でも）ブルジョアジーの自由主義にたいする幻想はできるだけすくなく、革命的国際プロレタリアートの成長にたいする注意はできるだけ多く！」（レーニン全集十五巻一六四～一六五頁「世界政治における可燃材料」一九〇八年）

「この先生がたは、帝国主義的世界戦争の残酷で、凶暴な環境をしばしばわすれている。この環境は空文句を許さない。実際の国際主義は一つしか、ただ一つしかない。すなわち、自国内の革命運動と革命的闘争とを発展させるために献身的に活動すること、例外なくすべての国でこれと同じ闘争、これと同じ方針を支持し、ただそれだけを支持すること（宣伝によって、共感によって、物質的援助によって）である。

これ以外のものはすべて欺瞞であり、マニーロコ気質である。

二年余の戦争のあいだに、国際的な社会主義運動と労働運動は、すべての国に三つの潮流を生みだした。そして、この三つの潮流をみとめ、分析し、実際の国際主義的潮流のために一貫して闘争するという現実的な基盤をはなれるものは、自分

を無力と無能と誤りの運命におとしいれるものである。

この三つの潮流というのは、つぎのものである。

㈠ 社会排外主義者、すなわち口さきでの社会主義者、実際の排外主義者。――これは、帝国主義戦争（まず第一に、いまの帝国主義戦争）での『祖国擁護』を承認する人々である。この連中は、われわれの階級的な敵である。彼らは、ブルジョアジーのがわに寝がえった人々である。

㈡ 第二の潮流――いわゆる『中央派』。――これは、社会排外主義者と実際の国際主義者とのあいだを動揺している人々である。『中央派』は、お人よしの小ブルジョア的空文句の世界、口さきでは国際主義、実際には臆病な日和見主義と社会排外者へのへつらいとの世界である。

問題の眼目は、『中央派』が、自国の政府にたいする革命の必要を確信しておらず、それを宣伝せず、献身的な革命的闘争をおこなわず、それを逃げるためのきわめて卑俗な、しかも超『マルクス主義的』に聞える、口実を考えだしている点にある。

社会排外主義者は、われわれの階級的な敵であり、労働運動内部のブルジョアである。彼らは、客観的にブルジョアジーに買収されて（より良い賃金、名誉ある地位等々）、自国のブルジョアジーが弱小民族を略奪し、圧殺し、資本主義的獲物の分配をめぐってたたかうのをたすけている労働者の層、グループ、部分を代表している。

㈢ 第三の潮流は、実際の国際主義者であって、これにもっとも近い立場を代表しているのは、『ツインメルヴァルド左派』である。

主要な特徴は、社会排外主義、ならびに『中央派』との完全な絶縁。自国の帝国主義政府と自国の帝国主義ブルジョアジーとに反対する献身的な革命的闘争である。原則は『主要な敵は自国内にいる』ということである。

甘ったるい社会平和主義的（社会平和主義者というのは、口さきでの社会主義者、実際のブルジョア平和主義者である。ブルジョア平和主義者は、資本のくびきや支配をくつがえさないで、永遠の平和を夢みている）空文句にたいしても、またいまの戦争に関連してプロレタリアートの革命的闘争とプロレタリア的社会主義革命とが可能であること、または適切であること、または時宜を得ていることを否定しようとする一切の逃げ口上にたいしても、仮借なく闘争していること。

この潮流のもっとも著名な代表者は、ドイツでは、カール・リープクネヒトをその一員とする『スパルタクス団』または、

『インテルナツィオナーレ・グループ』である。リープクネヒトは、この潮流と、新しい、ほんとうのプロレタリア的インタナショナルとの、もっともすぐれた代表者である。

カール・リープクネヒトは、ドイツの労働者と兵士にむかって、武器を自国の政府に向けるように呼びかけた。リープクネヒトは、このことを国会の壇上から公然とおこなった。それから彼は、非合法に印刷したビラをもって、ベルリンの最大の広場の一つであるポツダム広場に出ていって、『政府をたおせ』と呼びかけながらデモストレーションをおこなった。彼は逮捕されて、懲役を宣告された。彼はいまドイツの監獄につながれているが、また同じように、何千人でないまでも、何百人という真のドイツの社会主義者が反戦闘争をやったために監獄につながれている。

カール・リープクネヒトは、自国の社会排外主義者とだけでなく、また自国の中央派とも、演説や手紙で仮借なく闘争した。

一一〇名の代議士のなかで、カール・リープクネヒトとその友オットー・リューレの二人だけが、党の規律をやぶり、『中央派』や排外主義者との『統一』を破壊し、すべての人にさからった。ひとりリープクネヒトだけが、社会主義を、プロレタリアートの大業を、プロレタリア革命を、代表している。のこりのドイツ社会民主党全体は、ローザ・ルクセンブルグ（やはり『スパルタクス団』の一員で、その指導者の一人）の正しい表現を借りていえば、悪臭紛々たる屍である。

問題は、色合いにあるのではない。色合いならば、左派のあいだにもある。問題は潮流にある。かんじんかなめの点は、恐ろしい帝国主義戦争の時代に、実際の国際主義者となることは容易でないという点にある。こういう人々の数はすくないが、社会主義の全未来は彼らだけにある。彼らだけが大衆の誤導者ではなくて、大衆の指導者である。」（レーニン全集二四巻五四～五六頁「わが国の革命におけるプロレタリアートの任務」一九一七年五月）

「インタナショナルをどのようにして再設すべきか？　だが、――はじめにどのようにインタナショナルを再設してはならないかについて、二、三述べたい。

おお、万国の社会排外主義者は偉大な『国際主義者』である！　彼らは、戦争がはじまって以来、インタナショナルのた

めの配慮で心がいっぱいである。一方では、彼らは断言する。インタナショナルの崩壊をうんぬんするのは『誇張だ』、実際には、なにも特別なことがおこったわけではない、と。カウツキーの言うことを聞きたまえ。まったく、インタナショナルは『平時の用具』である。だから、戦時にはこの道具がいくらか役に立たないのは、あたりまえのことである、と。他方では、万国の社会排外主義者は、すでに生じた事態からのがれでる一つの非常に簡単な、――そして、肝心なことには、国際的な――手段を発見した。この手段はこみいったものではない。すなわち、戦争がおわるのを待ちさえすればよい、戦争がおわるまでは、各国の社会主義者は自分の『祖国』を擁護し、『自国の』政府を支持すべきである、だが、戦争がおわったら、おたがいに『大赦』をおこない、だれもみな正しかったことをみとめなければならない、平時にはわれわれは兄弟のようにくらすが、戦時には、――これこれの決議に正確にもとづいて――ドイツの労働者にむかってはそのフランスの兄弟をみなごろしにするように、またフランスの労働者にむかってはその逆のことをするように呼びかけることを、みとめなければならない、というのである。

この点については、カウツキーも、プレハーノフも、ヴィクトル・アドラーも、みな一様に意見が一致する。ヴィクトル・アドラーは書いている。『この困難な時期をきりぬけたときのわれわれの第一の義務は、たがいに難くせをつけあうのをやめることであろう』と。カウツキーはこう断言している。『いままでのところ、どの方面からも、まじめな社会主義者によって』インタナショナルの運命に『懸念をいだかせるような声はあげられていない』と。プレハーノフは言う。『罪もなくころされたものの血の臭いのする手（ドイツの社会民主主義者の）をにぎることは、快いことではない』と。しかし、彼はすぐ『大赦』を申しでる。『ここでは感情を理性にしたがわせることが、まったく適当であろう。インタナショナルは、みずからの大業のためには、おくればせの後悔でも、考慮してやらなければならないだろう』と。

要するに、戦争がすんだなら、カウツキーとプレハーノフ・ヴァンデルヴェルデとアドラーを委員とする委員会を任命しよう。そうすれば、相互大赦の精神に立つ『全員一致』の決議がたちどころにつくられるであろう。論争はうまいぐあいにぼかされてしまうであろう。労働者がおこった事がらを理解するのをたすけないで、紙のうえの見せかけの『統一』で労働者をだましてしまうだろう。万国の排外主義者と偽善者どもの連合が、インタナショナルの再建と呼ばれるであろう。

このような『再建』がなされる危険はきわめて大きいことに、われわれは目をつぶってはならない。すべての国の社会排外主義者は、みな同じようにこのような再建を利益としている。彼らはすべて同じように、自国の労働者大衆自身が、社会

主義かそれとも民族主義か、という問題を理解するのをのぞまない。彼らはすべて同じように、その罪をおたがいにかくしあうことを利益としている。彼らはすべて、『国際的』偽善の達人であるカウツキーの提案すること以外には、なに一つ提案できないのだ。

――（中　略）――

ドイツ社会民主党内の反対派内部の状態こそ、すべての国際主義者にとって最大の関心事であることは、すこしも疑いがない。才二インターナショナルでもっとも強力で指導的な党であった公認のドイツ社会民主党は、労働者の国際組織にもっとも手いたい打撃をあたえた。しかし、それと同時に、ドイツ社会民主党内にはもっとも有力な反対派が現れた。ヨーロッパの大きな党のうちでは、ドイツの党内でまっさきに、社会主義の旗にあくまで忠実であった同志たちが高い抗議の声をあげた。われわれは喜びをもって、『リヒトシュトラーレン』や『インテルナツィオナーレ』のような雑誌を読んだ。われわれは、たとえば『主要な敵は自国内にいる』という檄のような、非合法の革命的な檄が、ドイツ国内にひろまっていることを知って、さらに大きな喜びを味わった。これは、ドイツの労働者のあいだに社会主義の精神が生きていること、ドイツには革命的マルクス主義をまもることのできる人々がまだいることを、ものがたっていた。

ドイツ社会民主党の内部では、今日の社会主義の分裂がもっとも明瞭に現れた。ここには、きわめてはっきりと三つの流派が見られる。すなわち、どこでもドイツほどのひどい堕落と背教をしたところのない、排外主義者の日和見主義者たち、排外主義者の下僕の役割以外にはまったくなんの役割をはたせないことをドイツで証明したカウツキーの『中央派』、そして、ドイツで唯一の社会民主主義者である左派、これがそうである。

われわれがどれよりもいちばん関心を寄せているのは、もちろんドイツの左派内部の状態である。われわれはこの左派を、われわれの同志と見、すべての国際主義的分子の希望と見ている。

――（中　略）――

ともあれ、革命的な社会民主主義的分子は多くの国々にいる。彼らは、ドイツにも、ロシアにも、スカンディナヴィア（同志ヘーグルンドを代表者とする有力な一派）にも、バルカン（ブルガリアの『テスニャキ』党）にも、イタリアにも、イギリスにも（イギリス社会党の一部）フランスにも、オランダにも（トリブーネ派）、なおその他の国々にもいる。これらのマルクス主義分子を――最初はどんなに小数であろうとも――結集すること、彼らの名において今日わすれられている真の社会主義の言葉を大衆に思いださせること、すべての国の労働者に向かって、排外主義者と手を切って古くからのマルクス主義の旗のもとにあつまるよう呼びかけること、――これこそが当面の任務である。

いわゆる『行動』綱領をもついろいろの会議は、いままでのところ、完全である点に差こそあれ、単なる平和主義の綱領がその席上で宣言されるだけにおわっていた。マルクス主義は平和主義ではない。戦争を一刻もはやくおわらせるためにたたかうことは、必要である。しかし、『講和』の要求は、革命的な闘争への呼びかけを伴ってこそ、プロレタリア的な意味をもつものとなる。一連の革命なしには、いわゆる民主主義的講和は小市民的なユートピアである。真の行動綱領であるのは、おこった事がらについて、大衆に完全で明瞭な解答をあたえ、帝国主義とはなにか、それとどうたたかうべきかを説明し、才二イ

ンタナショナルの崩壊をもたらしたものが日和見主義であることを公然と言明し、日和見立義者をのぞき、彼らに反対して、マルクス主義的インタナショナルを建設するように公然と呼びかける、マルクス主義的な綱領だけであろう。こういう綱領は、われわれがみずからを信じ、マルクス主義を信じ、日和見主義にたいして生死の闘争を宣言することをしめすであろうが、このような綱領だけが、おそかれはやかれわれわれに真のプロレタリア大衆の共感を保証するであろう。

ロシア社会民主労働党は、ずっと以前に自党の日和見主義者と分裂した。ロシアの日和見主義者は、いまではさらに排外主義者ともなった。このことは、彼らとの分裂が社会主義のために必要であるというわれわれの意見をいっそうつよめるだけである。われわれは、社会民主主義者と社会排外主義者とのあいだの意見の不一致は、かつて社会民主主義者が無政府主義者と分裂したときの社会主義者と無政府主義者とのあいだの意見の不一致に、けっしておとらない、と確信する。『プロシア年報』のなかで日和見主義者のモーニトルがつぎのように言っているのは正しい。日和見主義者とブルジョアジーにとって、現在の統一は有利である。なぜなら、統一があれば、左派は排外主義者に服従せざるをえないし、労働者が論争を自分できわめ、自分たちの真に労働者的な、真に社会主義的な党をつくることが妨げられるからである、と。

われわれは心底からこう確信する、現在の事態のもとでは、日和見主義者や排外主義者との分裂は、革命家の才一の義務である。それはちょうど、黄色派、反ユダヤ主義者、自由主義的労働者団体などとの分裂が、まさにおくれた労働者をできるだけ早やく啓蒙し、彼らを社会民主党の隊列に引きいれるためにこそ、必要であったのと同様である、と。

われわれの考えによれば、才三インタナショナルは、まさしくこのような革命的な基礎のうえにつくられなければならないであろう。わが党にとっては、社会排外主義者と手を切ることが適切かどうかという問題は存在しない。わが党にとっては、この問題はきっぱりと解決されている。わが党にとっては、これを近い将来に国際的な規模で実現できるかどうかという問題が存在しているだけである。

国際的なマルクス主義的組織を実現するためには、まずさまざまな国に独立のマルクス主義党をつくりだす用意が必要であることは、まったくいうまでもない。ドイツは、労働運動がいちばん古くまた強力な国として、決定的意義を持っている。新しいマルクス主義的インタナショナルをつくりだす条件がすでに成熟しているかどうかは、遠からぬ将来にわかるだろう。もしそれが成熟しているとすれば、わが党は、日和見主義と排外主義を清掃した、そういう才三インタナショナルに喜んで加入するだろう。もしその条件が成熟していないなら、それは、この清掃をおこなうためには、まだ多少とも長期間にわたる進化が必要だということを、しめすものであろう。そのばあいには、わが党は、――革命的マルクス主義の基盤に立つ国際労働者協会の土台がさまざまな国にできあがるまでは――いままでのインタナショナル内部で最左翼の反対派となるであろう。

ここ数年間に国際的舞台で発展がどのようにすすむかを、われわれは知らないし、また知ることもできない。だが、われわれがたしかに知っていること、われわれが不動の確信をもっていることは、わが党がわが国でわがプロレタリアートのあいだで、右に述べた方向をめざしてうまずたゆまず活動し、その日常活動全体によってマルクス主義的インタナ

ショナルのロシア支部をつくりだすであろうということである。

わがロシアでも、露骨な社会排外主義者や『中央派』グループには事欠かない。これらの人々は、マルクス主義的インタナショナルの創設に反対してたたかうであろう。われわれは、プレハーノフがジュデクムと同一の原則的基盤に立っており、いまではすでに彼にむかって手をさしのべていることを知っている。われわれは、アクセリロードの指導するいわゆる『組織委員会』がロシアを基盤とするカウツキー主義を説いていることを知っている。これらの人々は、労働者階級の統一という口実にかくれて、日和見主義者との統一を、そして彼らを媒介としてブルジョアジーとの統一を説いているのだ。しかし、われわれが現在のロシアの労働運動について知っていることのすべては、ロシアの自覚したプロレタリアートがいままでどおり、わが党とともにあるであろうということを、われわれに完全に確信させる。」（レーニン全集二一巻、「社会主義と戦争」二九四～三〇〇頁一九一五年七～八月）

〈学習資料〉農業問題に関するレーニンの見解

「プレハーノフの第二次綱領草案にたいする意見」（六巻二八頁）

われわれは、もっとも抽象的な定式化をえらぶわけにはいかないし、またえらんではならない。なぜなら、われわれは批判家を攻撃する論文を書いているのではなく、クスターリや農民の大衆にむかって呼びかけている戦う党の綱領を書いているのだからである。われわれは彼らにむかっては、資本が「彼らを下僕や貢納者とし」、彼らを「零落させ」、彼らをプロレタリアートの隊列へ「駆逐している」ことを、明白また明瞭にかたらなければならない。そういう定式化だけが、どのクスターリにもどの農民にも幾千の実例が知られている事がらの、真実の描写となるであろう。また、そういう定式化からのみ、諸君のためのただ一つの救いはプロレタリアートの党に味方することである、という結論が、不可避的に出てくるであろう。

「ロシア社会民主党の農業綱領」（全集九一―一四五頁）――一部抜粋――

㈠　ロシア社会民主党に「農業綱領」が必要であることを、くわしく証明する必要はおそらくないだろう。われわれは、農業綱領を農業問題における、すなわち、農業にたいする、また農村住民の種々の階級、層、群にたいする、社会民主党の政策の指導原理を規定したものと、解する。

ロシアのような「農業国」では、当然、社会主義者の農業綱領は、もっぱらとはいえないにしても、主として「農民綱領」、すなわち、農民問題にたいする態度を規定する綱領である。大地主、農業賃金労働者および「農民」――これが、ロシアをふくめてあらゆる資本主義国における農村住民の三つの主要な構成部分である。そして、前述の三つの構成部分のうちの前二者（地主と労働者）にたいする社会民主主義者の態度は、すでにおのずから明確で明白であるとしても、「農民」については、その概念そのものさえが不明確であり、まして農民の生活様式とか農民の進化とかいう根本問題にたいするわれわれの政策にいたっては、なおさらそうである。

西欧で、ほかならぬ「農民問題」が社会民主主義者の農業綱領の全核心をなしているとするなら、ロシアでは、はるかに大きな程度でそうでなければならない。われわれの流派はロシアではまだまったく若く、また古いロシア社会主義全体は結局のところ「農民」社会主義であっただけに、われわれロシア社会民主主義者にとっては、農民問題におけるわれわれの政策をきわめて明確に規定することが、いっそう必要である。

なるほど、わが国のあらゆる色合いのナロードニキ的社会主義者ののこした遺産の守護者をもって自任しているあたまのロシアの「急進主義者」には、社会主義的なものはもはやほとんどまったくのこっていない。だが、「労働者」問題がすでにロシアの社会＝政治生活の前景に押しだされているという事実、そしてこの問題については彼らはなんの確固たる原理も持たず、彼らの十分の九はこの問題では実質上もっとも月なみなブルジョア的社会改良主義者であるという事実をあいまいにすることが、彼らにとって快適であればあるほど、それだけ彼らのすべてが、「農民問題」にかんするわれわれとの意見の相違をこのんで前面に押しだしている。最後に、この労働者問題にかんしてはほとんどすっかりロシアの急進主義者と（あるいは自由主義者と？）合流してしまった数多くの「マルクス主義批判家」もまた、ほかならぬ農民問題に力点をおこうとつとめている。

つぎに、「進歩的」な諸流派の理論的混迷や理論上の戦いとはべつに、運動そのものの純実践的な要請が、最近では農村における宣伝・煽動という任務を提起している。だが、この仕事をいくらかでも真剣かつ広範に組織していくことは、原則の点で一貫し政治的に適切な綱領がなければ不可能である。そしてロシアの社会民主主義者は、それが特別な一流派としてこの世に現れたそもそもの初めから、「農民問題」の全重要性をみとめていた。「労働解放団」が作成して一八八五年に出版したロシア社会民主主義派の綱領草案には、「土地関係（農民の土地の買取および分与の条件）の徹底的改訂」の要求がかかげられていることに、記憶を促そう。

㈤　農民にかんするわれわれのあらゆる要求の性格を規定している第二の一般的命題にうつろう。これは、「農村における階級闘争の自由な発展をはかるために・・・」という句に表現されている。

右の句は、一般に農業問題の原則的な提起のためにも、またとくに個々の土地要求の評価のためにも、きわめて重要である。農奴制度の残存物を一掃するという要求は、われわれと、首尾一貫した自由主義者、ナロードニキ、社会改良家、農業問題におけるマルクス主義批判家その他等々とに、共通する要求である。そういう要求をかかげるばあいには、われわれと、これらすべての諸氏とは原則的に異なるのではなく、程度の差異があるだけである。すなわち、彼らはこの点でも不可避的につねに改良の限界内にとどまるであろうが、われわれは社会革命的要求をかかげるのをためらわない（前述の意味において）という差異である。

これに反して、「農村における階級闘争の自由な発展」を保障することを要求するばあいには、われわれは、これらすべての諸氏と、さらにはまた社会民主主義者でない革命家や社会主義者の全部とさえ、原則的に対立することになる。このあとのほうの人々もまた、農業問題における社会革命的要求をかかげるのをためらわないであろうが、しかし彼らは、これらの要求を農村における階級闘争の自由な発展というような条件に従属させようとはおもわないだろう。

この条件は農業問題の分野における革命的マルクス主義理論の基本的な中心点である。この条件を承認することは、つぎのことを承認することを意味する。すなわち、農業の進化はきわめて錯雑しており複雑であるにもかかわらず、またこの進化の形態が種々さまざまであるにもかかわらず、この進化もやはり資本主義的進化であるということ、この階級闘争こそ、われわれの第一の根本的な関心事

でなければならず、われわれが原則的問題をも、政治的任務をも、宣伝・煽動・組織の方法をも、それにかけて検査する試金石でなければならないことがそれである。　という

また、この条件を承認することは、小農民を社会民主主義運動に参加させるという、とくに焦眉の難問題においても確固たる階級的立場に立つ義務を負い、いかなる点でも小ブルジョアジーの利益のためにプロレタリアートの立場をゆずることなく、反対に、近代資本主義全体によって零落させられ抑圧されている小農民に、自己の階級的立場を捨ててプロレタリアートの立場に立つよう要求する義務を負うことを、意味する。

この条件を提起することによって、われわれは、とりもなおさず、自分たちの敵からだけでなく、農業問題の提起におけるその中途半端なやり方によってプロレタリアートの革命運動に多くの害悪をもたらす恐れのある（そして実際にもたらしている）頼りにならない友人たちからも、自分を柵で仕切るのである。

われわれは、この条件を提起することによって、導きの糸――それをつかんでいさえすれば、社会民主主義者は、どんなへんぴな農村にほうりだされてさえも、また一般民主主義的任務を前面に押しだすきわめて錯雑した農業関係に直面させられてさえも、これらの任務を解決するにあたって自己のプロレタリア的立場をつらぬき強調することができるような、そういう導きの糸を引くのである。それは、われわれが一般民主主義的な政治的任務を解決するばあいにも依然として社会民主主義者であるのと、まったく同じことである。

われわれは、この条件を提起することによって、とりもなおさず、多くの人がわれわれの農業綱領の具体的要求を走り読みしていだくつぎのような反対論にこたえるのである。……「土地買取賦払金と切取地とを農村共同体にかえす」のだって!?――それでは、われわれプロレタリアートの特殊性とわれわれプロレタリアートの自主性はいったいどこにあるのだ？　これは、実質上、農村ブルジョアジーへの贈り物になりはしないか??

たしかに、そのとおりである。――だがそれは、農奴制度の没落そのものもまた「ブルジョアジーへの贈り物」であったのと、すなわち、ほかのいかなる発展でもなく、ほかならぬブルジョア的発展を農奴制的な足かせと拘束から解放したのと、同じ意味においてにすぎない。

プロレタリアートが、ブルジョアジーに抑圧されブルジョアジーと対立している他の諸階級と異なる点は、プロレタリアートがブルジョア的発展の阻止に、階級闘争の隠蔽あるいは緩和に、望みをかけるのではなく、反対に、階級闘争のもっとも完全で自由な発展に、ブルジョア的進歩の促進に、望みをかけていることである（いうまでもなく、プロレタリアートは、ブルジョア的進歩を促進する方策ならなんでも擁護するのではなく、それらのうちで、自己の解放をめざす労働者階級の闘争能力をつよめるのに直接影響あるものだけを擁護するのである）。発展しつつある資本主義社会では、その発展を拘束している農奴制の残存物の一掃を、そのことによってブルジョアジーをつよめ、堅固にしないような仕方で行なうことはできない。このことで「困惑する」というのは、政治的自由はブルジョアジーの支配をつよめ堅固にするからわれわれにはなんにもならない、と言った社会主義者たちの誤りをくりかえすことを意味する。

(七)　農民の革命的積極性に期待し、農民のために最小限綱領ではなく最大限綱領を提起するからには、首尾一貫することが必要であ

り、農民的な「黒い割替」か、さもなければブルジョア的土地国有化を要求すべきである、というのである！　マルトィノフはこう書いている。「もしわれわれが土地のすくない多数の農民のための真の（原文のまま！）階級的スローガンを見つけたいとおもうなら、われわれはもっと先にすすまなければならないであろう、――われわれは、『黒い割替』の要求を提出しなければならないだろう。だがそうなれば、われわれは、社会民主主義的綱領と手をきらなければならなくなるだろう」と。

この議論は、「経済主義者」の本性をいちじるしくくっきりとあらわしており、神にいのらせれば額をぶっつけていのる人々についての諺をおもいおこさせる。

君たちは、小生産者の一定の層の一定の利益を実現するいくつかの要求の一つに賛成した。したがって、君たちは自己の見解を捨てて、その層の見解にうつらなければならない!!　というのだ。――したがって、そうはけっしてならない。そのように判断するのは、ある階級のひろく解した利益に合致する綱領の作成ということを、この階級にたいするご機嫌とりと混同する「追随主義者」だけである。われわれはプロレタリアートの代表者であるが、それにもかかわらず、もっぱら「目に見える成果を約束する」要求のために戦わなければならないというようにいう、未熟のプロレタリアの偏見を、率直に非難する。またわれわれは、農民の進歩的な利益と要求を支持しながらも、農民の反動的な要求は断固として拒否する。

ところで「黒い割替」だが、古いナロードニキ主義のもっともきわだったスローガンの一つであるこのスローガンには、まさに、革命的契機と反動的契機とが絡みあってふくまれている。そして社会民主主義者は、自分たちがばかの一つ覚え式にナロードニキ主義全体を捨てさるのではけっしてなく、ナロードニキ主義からその革命的要素、一般民主主義的要素をとりだして、これを自分たちのものとして承認するのだということを、数十回もくりかえして述べている。黒い割替という要求においては、小農民生産を普遍化し永久化しようという空想は反動的であるが、しかしこの要求のなかには、（「農民」が社会主義的変革の担い手でありうるかのようにいう空想のほかに）革命的な側面もある。すなわち、農民の蜂起によって農奴制度のいっさいの残存物を一掃しようという願望がそれである。

われわれの考えによれば、切取地の返還という要求は、農民のいっさいの二面的な、矛盾した要求のなかから、まさにもっぱら社会発展全体の方向にそって革命的に作用することができ、そのうえプロレタリアートが支持するに価いするものを、抜き出しているのである。「先にすすもう」というマルトィノフの勧誘は、実際には、われわれが農民の「真の」階級的スローガンを、真に正しく理解されたプロレタリアートの利益の見地……ではなく、農民の真の偏見の見地から決定するという、ナンセンスに導くにすぎない。

土地国有化は、これとは異なる。この要求は（もしそれを、社会主義的な意味にではなく、ブルジョア的意味にとるなら）、実際に、切取地の返還という要求より「先にすすんで」おり、そして原則的にはわれわれもこの要求に完全に同意する。ある革命的時機には、いうまでもなく、この要求を提起することを拒否しないであろう。

しかし、われわれは、現在のわれわれの綱領を、革命的蜂起の時代のためにのみ作成しているのではなく、いやその時代のためというよりは、むしろ、政治的奴隷状態の時代の

ために、すなわち政治的自由にさきだつ時代のために、作成しているのである。

だが、こういう時代には、土地国有化の要求は、農奴制との闘争という意味での民主主義運動の直接の任務を表現する点では、はるかに弱いのである。農民委員会の設置と切取地の返還という要求は、農村における現在の階級闘争を直接に燃えあがらせるものであり、それゆえにこの要求は、なにか国家社会主義の精神での実験などに論拠をあたえ得ないのである。これとは反対に、土地国有化の要求は、農奴制のもっとも鮮明な現れともっとも強力な遺制から、関心をある程度そらせることになる。

だから、われわれの農業綱領は、農民のなかの民主主義運動をおしすすめる手段の一つとして、いますぐ提出し得るし、また提出されなければならないのである。これに反して、専制のもとだけでなく半立憲君主制のもとでさえ、国有化の要求を提出することは、あきらかに誤りであろう。なぜなら、すでに完全に堅固となり、ふかく根を張った民主主義的政治機関が欠如しているばあいには、この要求は、「農村における階級闘争の自由な発展」に刺激をあたえるよりも、むしろはるかに、国家社会主義のばかげた実験のほうに、考えをそらせるであろうからである。

カウツキーは、フォルマールに反対して書いた論文の一つで、非常に正しくこう指摘している。「イギリスの先進的労働者は土地国有化を要求してもさしつかえない。だが、ドイツのような軍事＝警察国家のすべての土地が国有地とされたら、いったいどんなことになるだろうか？　この種の国家社会主義の実現は、すくなくとも相当程度にメクレンブルグで見いだされる。」と。

だからこそわれわれは、現代の社会制度を土台とするわれわれの農業綱領の最大限は農民改革の民主主義的改訂以上に先にすすんではならない、と考えるのである。土地国有化の要求は、原則的見地からみればまったく正しく、ある時　期には　適当なものであるが、現時機においては政治的に適切でないものなのである。

ナデジヂンが、まさに土地国有化のような最大限にまでゆきつこうとつとめるあまり、道にまよってしまったこと（部分的には、彼が綱領では「百姓に分りやすくて必要な要求」に限定しようという決心をかためたことのおかげで）に注意するのは、興味がある。

ナデジヂンは、国有化の要求をつぎのように定式化している。「国有地、皇族領地、教会所有地、地主の土地を人民の財産にかえ、きわめて特恵的な条件で勤労農民に長期賃貸するための人民的フォンドにすること。」

疑いもなく、「百姓には」この要求は分りやすいであろうが、社会民主主義には、たしかに分りやすくはない。土地国有化の要求が社会民主主義的綱領の原則的に正しい要求であるといっても、それは、社会主義的方策としてではなく、ブルジョア的方策としてにすぎない。なぜなら、社会主義という意味では、われわれはすべての生産手段の国有化を要求するのだからである。

われわれがブルジョア社会の土台のうえにとどまりながら要求できるのは、地代を国家に移譲することだけである。――そしてこの移譲は、それ自体として、農業の資本主義的進化を阻止しないばかりか、反対に、それを促進さえするであろう。

だから、社会民主主義者は、ブルジョア的土地国有化を支持するばあい、第一に、ナデジヂンがやったのとはちがい、けっして農民の土地を除外してはならないであろう。もしわれわれが私的土地経営を保存して、私的土

地所有だけを廃絶するのなら、その点で小所有者のために除外規定をもうけることは、まったく反動的であろう。

第二に、このような国有化のばあい、社会民主主義者は国有地を資本家――農業における企業家――よりも「勤労農民」に優先的に賃貸するということには、断固として反対するだろう。このような優先的取扱いは、資本主義的生産様式が支配しているか、存続している条件のもとでは、これまた反動的であろう。ブルジョア的土地国有化を企てるような民主主義国があったとすれば、この国のプロレタリアートは、大きな賃借者と小さな賃借者のどちらにも優先権をあたえることなく、あらゆる賃借者が法律できめられた労働保護の規則ならびに土地と家畜との合理的な取扱いにかんする規則を順守するように、無条件に要求しなければならないであろう。ブルジョア的国有化が行われた場あいのプロレタリアートのこのような振舞は、小規模生産にたいする大規模生産の勝利を促進するのに等しいであろう。

なにがなんでも「百姓に分りやすい」ものにしようとする志向は、ここでナデジヂンを反動的な小ブルジョア的空想の密林に導いてしまったのである。

このように、切取地の返還という要求にたいする反対論の検討は、これらの反対論が成りたたないものであることをわれわれに確信させる。われわれは、農民改革の民主主義的改訂、しかもそれの土地関係の改革という要求をかかげなければならない。ところで、この改訂の性格の限界と実行方法を正確に規定するためには、われわれは、農奴制経済の遺制を維持する手段となっている「切取地」の収奪、買取り、交換その他を行う権限をもつ農民委員会の設置を、提案しなければならない。

(ニ)　最後に、われわれの農業綱領の根底にある基本的な諸名題を要約しよう。

綱領の作成にあたるか、他国での綱領の作成の詳細を知る機会のあったものならだれでも、同一の思想を多様な仕方で定式化できることを知っている。――われわれにとって重要なことは、いまわれわれの草案をその判断にゆだねるすべての同志諸君が、なによりもさきに、またなににもまして基本的な諸原則にかんして、完全な同意に達することである。そのばあいには、定式化の仕方のあれこれの部分的特殊性は、決定的な意義をもつものではない。

われわれは、ロシアの農業制度の分野でも中心的な事実は階級闘争であると、みとめる

われわれは、この事実とそれから派生するいっさいの結果との確固たる承認にもとづいて、われわれの全農業政策（したがってまた農業綱領）を立てている。われわれの当面の主要目標は、農村における階級闘争の、全世界の社会民主主義の終局目標の実現をめざすすなわちプロレタリアートによる政治権力の獲得および社会主義社会の基礎の創造をめざす、プロレタリアートの階級闘争の自由な発展のための道をきよめることである。階級闘争をすべての「農業問題」における自分たちの導きの糸と宣言するわれわれは、まさにそのことによって、中途半端であいまいな諸理論――「ナロードニキ的」「倫理社会学派的」「批判家的」社会改良的、その他どういう名称がついていようとも――のロシアにおけるきわめて多数の支持者たちから、自分を断固として峻別するのである。！

農村における階級闘争の自由な発展のための道をきよめるには、げんざい、農村住民の内部で資本主義的敵対の萌芽を隠蔽して、その萌芽の発展をおさえている農奴制度のいっ

さいの残存物を除去することが不可欠である。そしてわれわれは、農民がこれらのいっさいの残存物を決定的な一撃で一掃するのを援助する最後の試みを行うのである。――「最後の」というのは、発展しつつあるロシア資本主義そのものも、自然発生的にこれと同じ働きを行っており、同じ目標にむかってすすんでいるからである。ただそれは、暴力と抑圧零落と餓死という、資本主義に固有の道によってすすんでいるのである。

農奴制的搾取から資本主義的搾取への移行は不可避である。そして、この移行を阻止したり、または「回避」したりしようと試みることは、有害な反動的幻想であろう。しかしこの移行は、「貨幣の権力」にではなく、以前の奴隷所有者の権力の伝統に立脚して、家父長制的農民からいまやその体液の最後の一滴までも吸いとりつつある農奴主たちの子孫を暴力的に転覆するという形でも、考えられる。現物経済制度のもとで自分の手の労働によって生きているこの家父長制的農民は、消滅すべき運命にある。だが、「ぜひとも」、社会＝経済的進化の「内在的」法則によって「公租の絞りとり」と笞との責苦、長期にわたる点で恐ろしい長びいた餓死の苦しみを受けるべき運命にさだめられているのではけっしてない。

そこで、われわれは、資本主義社会（ロシアはますますそうなりつつある）で小生産者が繁栄するという幻想、あるいはどうにかがまんできる生存をつづけていけるという幻想すらいだかずに、農奴制の遺物の完全かつ無条件の、改良主義的ではなく革命的な、廃止と一掃とを要求する。われわれは、貴族政府によって農民から切り取られ、いまにいたるまで引きつづき農民を事実上の奴隷状態に引きとどめている土地を、農民のものとみとめる。こうしてわれわれは――例外として、また特別の歴史的事情のために――小所有者の擁護者となるのであるが、ただわれわれは、「旧制度」からそのままのこされている事物に反対する小所有者の闘争においてのみ、また、不動の、うちのめされ、みすてられた状態のままに凝固してしまった家父長制的なオブローモフ的農村の改造を阻止している諸制度の廃止を条件としてのみ、また移動の完全な自由と土地取引の自由とをつくりだし、身分的区分を完全に廃絶することを条件としてのみ、小所有者の擁護者となるのである。われわれは、ロシアの公法および民法の民主主義的改訂を、悪名高い「農民改革」の民主主義的、革命的改訂によって補足しようとおもっているのである。

農業政策のこういう原則を指針とするロシアの社会民主主義者は、農村にはいったばあいには、そこにある諸関係の複雑な網を解きほぐすことができ、自分の厳格に一貫した革命的な宣伝と煽動をそれらの関係に「適応させる」ことができるであろう。そのときには彼は、ありうべき農民運動（どこかでもうはじまりつつあるようにみえる）に不意をおそわれるようなことはないだろう。彼は、われわれの綱領のなかの「労働者」の当面の要求の部でくわしく叙述されている、農業賃金労働者の擁護のための要求を、もちろん、いつどこでも提出するであろうが、それに限定しないであろう。彼は、農民のなかでも一般民主主義的運動を推進することができるであろう。そしてこの運動は、（わが国の農村で萌芽状態の範囲をこえてすすむ運命にあるとすれば）、農村の農奴主との闘争からはじまって、――ツァーリ専制と呼ばれる、あの農奴制のもっとも強力でもっともいまわしい残存物にたいする蜂起におわるであろう。

「われわれの綱領草案にたいする批判への回答」（六巻四五八頁）

この筆者は、彼が切取地と債務奴隷制とのあいだの関連の存在を疑うことの妥当性を、なんによっても全く証明しなかったが、彼はさらにつぎのように論じている。すなわち、切取地の返環は、農民経営の必要性にもとづくというよりは、歴史的「言い伝え」にもとづいての、小土地片の分与である。それは、不十分な大きさの土地を分与するあらゆるばあいと同じように（十分な大きさの土地を分与するということは問題になり得ない）、債務奴隷制を一掃しないばかりか、かえってそれをつくりだすであろう。なぜなら、それは不足分の土地の借地、困窮による借地、自家食糧のための借地を引きおこすからであって、したがって、それは反動的方策となるだろう、と。

議論はまたまた的をはずれている。なぜなら、われわれの綱領が農業の部で「約束」しているのは、けっして、あらゆる困窮一般を除去することではなく（綱領がそういう除去を約束しているのは、一般社会主義的部分においてだけである）、農奴制度の残存物（たとえ、そのいくつかのものにせよ）を除去することだけだからである。われわれの綱領が述べているのは、およそ小土地片ならなんでも分与するということではなくて、すでに形成されているさまざまの種類の債務奴隷制の一つだけでも除去するということである。

筆者は、われわれの綱領の基礎にある思想の行程からそれて、綱領にたいして勝手に、誤って、別の意義を付与している。実際、彼の立論を検討してみたまえ。彼は、切取地を単なる混在耕地という意味だけに解釈することをしりぞけて（そして、この点では彼は、いうまでもなく正しい）、つぎのように述べている。「もし切取地が土地の追加的分与であるとすれば、切取地が債務奴隷的関係を一掃するのに、十分なだけあるかどうかを検討する必要がある。というのは、この観点からみれば、債務奴隷制的関係は土地不足の結果だからである」。

われわれの綱領は、切取地が債務奴隷制を一掃するのに十分だなどとは、断じて、どこでも主張していない。いっさいの債務奴隷制をのこらず一掃するのは、ただ社会主義革命をまってはじめて可能なことである。ところが、われわれは、農業綱領では、ブルジョア的諸関係の基盤に立っており、農奴制度の残存物を「除去するための」（それが完全な除去となりうるとさえ、言っていない）いくつかの方策を要求しているのである。われわれの農業綱領の全核心は、農村プロレタリアートが、農奴制の残存物を一掃するため、切取地を獲得するために、富農とともに戦わなければならない、という点にある。

この命題を注意ぶかく考察する人には、それだけでは不十分なのに、なぜ切取地にかぎるのか、というような反論の誤りと不適当さと非論理性がわかるであろう。これにかぎる理由は、プロレタリアートは、農奴制の一掃以上には、切取地等々以上には、富農とともにすすむことができないし、またすすんではならないからである。それからさきは、一般にプロレタリアートとくに農村プロレタリアートは、単独ですすんでいくであろう。「農民」とともにではなく、富裕な百姓とともにではなく、富裕な百姓に反対してすすんでいくであろう。

われわれが切取地以上にすすまないのは、われわれが百姓のためをおもわないからでも、ブルジョアジーをおびえさすのをおそれるからでもなくて、農村プロレタリアが、必要以上に、プロレタリアにとって必要な以上に、

富裕な百姓をたすけることを、われわれが欲しないからである。農奴制的債務奴隷制には、プロレタリアも富裕な百姓もともにくるしんでいる。この債務奴隷制に反対しては、彼らはともにすすむことができるし、またすすまなければならない。だが、その他の債務奴隷制に反対しては、プロレタリアートは単独ですすんでいくであろう。だから、農奴制的債務奴隷制をその他のいっさいの債務奴隷制から別にとりだすことは、われわれの綱領では、プロレタリアートの階級利益を厳格にまもることの必然的結果なのである。

もしわれわれがわれわれの綱領のなかで、「農民」(すなわち、富農プラス貧農)は農奴制度の残存物の一掃をこえても、ともにすすむだろうと仮定するなら、われわれはプロレタリアートの階級利益にそむき、プロレタリアートの階級的立場を放棄することになるであろう。また、われわれはそのことによって、農村プロレタリアートが経営上手な農民から最終的に分離する過程、社会民主主義者の見地からして無条件に必要でもっとも重要な、農村におけるプロレタリア的階級意識の成長の過程に、ブレーキをかけることになるであろう。

古い信条の信奉者であるナロードニキや、どんな信仰もどんな信念ももたない人々であるエス・エル派が、われわれの農業綱領を読んで肩をすくめてみせるとすれば、それは、彼らが、わが国の農村の実際の経済構造とその進化についてなんにも理解せず、また、共同体内部で形成されつつあり、そしてほとんど形成されおわったブルジョア的諸関係についても、ブルジョア的農民の力についても、なんの理解ももたないことからおこるのである。彼らは、古いナロードニキ主義的偏見をもって、あるいは、もっとしばしばみられることだが、それらの偏見の断片をもってわれわれの農業綱領にたちむかい、われわれの農業綱領がどんな目標を追求しているのか、それがどんな社会=経済関係を考慮にいれているのかをさえ理解せずに、この綱領の個々の条項や、またはそれらの条項の定式化を批判しはじめるのである。われわれが彼らにむかって、われわれの農業綱領のなかで問題になっているのは、ブルジョア体制との闘争ではなくて、農村をブルジョア体制の諸条件のなかに引き入れることであると、かたってきかせるというと、彼らは、自分らの当惑がナロードニキ的世界観とマルクス主義的世界観との闘争の単なる反響にすぎないことをさとらないで(彼らに固有の理論的無関心からして)、ただ眼をこするだけなのである。

農業綱領の作成に着手しているマルクス主義者にとっては、ブルジョア的な、また資本主義的発展をとげつつあるロシアの農村における農奴制の残存物の問題は、すでに解決ずみの問題であって、ただ社会革命党の人たちの完全な無原則性だけが彼らを妨げて、本質に触れた批判を行うためには、この問題にたいするわれわれの解答に、せめてなにか脈絡のとおった、全一的な解答を対置する必要があることを、見させないのである。マルクス主義者にとっては、任務は、ただつぎの二つの極端を避けることにしかない。すなわち、一方では、プロレタリアートの見地からすれば非プロレタリア的な、当面の一時的な任務などはわれわれになんの関係もない、と言う人々の誤りに陥らないこと、他方では、当面の民主主義的任務の解決へのプロレタリアートの参加が、彼らの階級意識とその階級的独自性をくもらせることのないようにすることである。本来の土地関係の分野では、この任務はつぎのことに帰着する。すなわち、現存社会を基盤にしながら、農奴制度の残存物を

もっとも完全に一掃し、一体としての農民大衆のうちから農村プロレタリアートをもっともすみやかに離脱させるような、そういう土地改革のスローガンをあたえることである。

われわれの綱領はこの任務を解決したと、私にはおもわれる。だから、もし農民委員会が切取地ではなくてすべての土地を要求したら、どうするのか、という同志イクスの質問は、われわれをすこしも当惑させない。

われわれは自身でもすべての土地を要求する。ただそれは、もちろん、「農奴制度の残存物を除去することを目的として」(われわれの農業綱領の部は、こういう目的に限定されている)ではなく、社会主義的変革を目的としてのことである。そしてわれわれは、いつどんな事情のもとでも、まさにこの社会主義的変革の目標を、倦むことなく「貧農」に指示しているし、今後も指示していくであろう。

社会民主主義者は自分の綱領の農業の部だけをもって農村にはいっていくことができるとか、社会民主主義者は自分の社会主義の旗をたとえ一分間でも捲くことができるとか考えるなら、これ以上の大きな誤りはない。すべての土地という要求が、国有化の要求、あるいはこんにちの経営上手の農民に土地を引きわたせ、という要求となるようなら、われわれは、あらゆる事情を考慮に入れたのちに、プロレタリアートの利益の見地からこの要求を評価するであろう。たとえば、革命がわが国の経営上手な農民を政治生活にめざめさせるとき、彼らが民主主義的革命党として登場するか、それとも現秩序の党として登場するかどうかを、われわれはまえもっていうことはできない。そして、もしよりよい組合せが実現されるなら、それはわれわれの活動を容易にし、これに新しい刺激をあたえるだけであろう。

――中略――

そして、注意されたいのは、われわれが切取地の返還という要求をかかげるのは、わざと自己の任務を現存制度の粋内にとどめているのだ、ということである。もし最小限綱領について述べるのなら、またもし、一方では協同組合、他方では社会化を「前景」に押しだしたりすることで、山師と紙一重の、ゆるしえない空想計画に陥りたくないなら、われわれは、ぜひともこのようにしなければならない。

もしわれわれが、ロシアの「農民」改革の歴史全体によって提起された、この緊急な、しかしけっして社会主義的でない問題を回避するなら、われわれは無政府主義者か、単なる冗舌家になってしまうだろう。われわれは、われわれが提起したのではないこの問題にたいして、社会民主党の見地からみて正しい解答をあたえなければならない。

われわれは、自由主義社会全体がすでに要求してきた農業改革、分別ある人ならだれでもそれなしにロシアの政治的解放をおもいうかべることのない農業改革にたいする、自分の立場を規定しなければならない。

そしてわれわれは、プロレタリアートの階級意識を倦むことなく、ひたすら発展させることと並行して、真に民主主義的な運動を支持するという自己の原則に絶対に忠実をたもちながら、この自由主義的な(科学的な意味で、すなわちマルクス主義的な意味で自由主義的な)改革にたいする自己の立場を規定するのである。われわれは、政府または自由主義者がきょうあすに企てなければならないこのような改革における、実践的行動方針をあたえるのである。あいまいな、人道的な万人向き社会主義の幻想によって編みだされたスローガンではなく、生活によって実際に提起

された改革を革命的な結末にまで押しやるようなスローガンを、われわれはあたえるのである。

「ロシア社会民主労働党第二回大会――農民」（レーニン全集六巻四九四頁）

大会は、農民のあいだの活動を発展させ強化することの重要性に全党員の特別の注意を喚起する。農民にたいして（また、とくに農村プロレタリアートにたいして）社会民主党の綱領全体をあますところなくしめし、現存の体制を基盤とする最初の当面の諸要求としての農業綱領の意義を説明しなければならない。自覚した農民や農村のインテリゲンツィア活動家のなかから、党委員会と恒常的な連絡をもつ、結束の固い社会民主主義者グループを形づくるために努力しなければならない。無原則性と反動的なナロードニキ主義的偏見とをまきちらしている社会革命党の宣伝にたいして、農民自身のあいだで対抗活動を行わなければならない。

「農業綱領審議にさいしての第一の演説」（レーニン全集五〇八頁）――一部抜粋――

われわれが拠りどころとしているのは、こんにちの現実であり、いまプロレタリアートの解放闘争を拘束し、阻止しているところのものである。君らは大昔に立ちもどるものだ、といってわれわれを非難するものがいる。この非難は、あらゆる国の社会主義者の活動についての、もっともひろく知られた事実を知らないことをしめすものにすぎない。

いたるところで、あらゆる場所で、社会民主主義者は、ブルジョアジーがやりとげなかった仕事を完成するという任務を提起し、実行しつつある。これこそ、いまわれわれがやっていることである。だが、これをやるためには、ぜひとも過去に立ちもどらなければならない。

同志エゴーロフは、綱領の起草者たちにむかって、綱領の意義をただした。彼はこうたずねた。綱領は、ロシアの経済的進化にかんするわれわれの基本概念からの結論であるのか、また政治的改革のありうべき、また不可避な結果についての科学的予想なのか、それとも、われわれの綱領は、実践的な煽動スローガンであるのか、もしそうなら、われわれは、社会革命党のレコードをやぶりえないし、この綱領は正しくないものと認めなければならない、と。

私は、同志エゴーロフが行ったこの区別が私には理解できないことを言わなければならない。もしわれわれの綱領が第一の条件をみたしていないなら、それはまちがったものであって、われわれはそれを採用するわけにはいかないであろう。もし綱領が正しいものであれば、それは煽動のための実践的に役に立つスローガンを与えざるを得ない。

同志エゴーロフの、この二つの間のディレンマのあいだの矛盾は、外見的なものにすぎない。それは、実際に存在するはずがない。なぜなら、正しい理論的解決は、煽動の確固たる成功を保障するからである。

同様に、同志リーベルも、ずっと以前に拒否されている反論をくりかえして、われわれの綱領の「貧弱さ」に驚き、農業の分野でも「根本的な改革」を要求した。同志リーベルは、綱領の民主主義的部分と社会主義的部分との差異をわすれてしまったのだ。

彼は、民主主義的綱領のうちに社会主義的なものがないということを、「貧弱」さとみた。彼は、われわれの農業綱領の社会主義的な部分が、他の箇所にあること、すなわち、労働者の部にふくまれていることに気がつか

なかった。この部は、農業にも関係があるのである。ただ社会革命党だけが、彼らの持前の無原則性から、民主主義的要求と社会主義的要求を混同することができるし、また不断に混合しているのであって、プロレタリアートの党は、両者をきわめて厳密に分離し、区別する義務がある。

「われわれの農業綱領について――第三回大会への手紙」（レーニン全集二四三頁）

日ごとに成長し激化しつつある新しい農民運動は、われわれの農業綱領の問題をふたたび前面におしだしている。もちろん、この綱領の基本原則が、意見の相違や論争の種となることはありえない。プロレタリアートの党は当然、農民の運動を支持しなければならない。プロレタリアートの党は、こんにちの地主的土地所有を農民の革命的攻撃からまもろうとはけっしてしないであろうが、それと同時に、農村における階級闘争を発展させ、この闘争に意識性をもちこむことに、つねに努力するであろう。これらの原則については、すべての社会民主主義者が同意見であると、私はおもう。これらの原則を現実に適用しなければならないときに、これらの原則を現時の任務にあてはめて綱領のなかに定式化しなければならないときにはじめて、意見の相違がはじまるのである。

現実は、なによりもよく、ありとあらゆる理論上の意見の相違を解決するものであって、私は、革命的諸事件の急速な進行が、社会民主主義者のあいだでの農業問題にかんするこれらの意見の相違をも除去するだろうと、確信している。ありとあらゆる土地改革にかんして空想計画を立てるのはわれわれの仕事でないこと、また、われわれはプロレタリアートとの結びつきをつよめ、農業運動を支持しなければならないが、そのさい、経営主としての農民の所有者的傾向――その傾向のプロレタリアートにたいする敵意は、革命の前進が急速であればあるほど、それだけすみやかにまたするどく現れるであろう――を見おとしてならないことは、おそらくだれも否定しようとはしないであろう。

だが、他方では、われわれのいま際会している革命的時機が、完全に明確な具体的スローガンを要求していることは、明らかである。そのようなスローガンとなるべきものは、革命的農民委員会の結成ということであって、わが党の農業綱領はまったく正当にこのスローガンを提出した。

農民運動のうちには、多大の無知、無自覚性があり、この点でなんらかの幻想をえがくことはきわめて危険であろう。百姓の無知はなによりも運動の政治的側面の無理解に、――たとえば、国家全体の全政治制度に根本的な民主主義的改革が行われなければ、土地所有を拡大する道に沿ってどういう恒久的な歩みもまったく不可能であることを、理解していないことに現れている。

農民は土地を必要としており、そして彼の革命的感情、彼の本能的な、原始的な民主主義は、地主の土地に手をくだす以外の仕方では現れることができない。このことは、もちろん、だれも否定しようとはしないであろう。社会革命派は、農民のこのぼんやりした志向を階級的分析をもって取りあつかおうとはしないで、この立場で停止している。

だが、社会民主主義者は、そのような階級的分析にもとづいてつぎのように主張する。農民全体は、一体となっては、切取地の返還という要求をこえてすすむことはとうていできないであろう。なぜなら、このような土地改革の限界をこえるなら、農村プロレタリアートと「経営上手な百姓」との敵対が不可避

的にはっきり現れてくるからである、と。

社会民主主義者は、もちろん、蜂起した百姓が「地主を徹底的に打ちのめし」、彼からすべての土地をうばいとることにたいして、なんら反対する理由はありえないが、しかし社会民主主義者は、プロレタリア的綱領のなかで冒険主義にはまりこむことはできないし、有産者の階級あるいは部類の移動にすぎないような、土地所有の再編成（たとえ民主的な再編成であっても）という華やかな見通しで、有産者にたいする階級闘争をおおいかくすことはできない。

これまでわれわれの綱領のなかには切取地の返還という要求がかかげられていたが、綱領にたいするいろいろの注解のなかではつぎのように指示されてきた。すなわち、切取地はけっして垣根ではなくて、「もっとさきにすすんでいくための扉」であり、そして、プロレタリアートは、このもっとさきの道でも喜んで農民を支持するが、自分たちの一時的な同盟者である経営主としての農民がその経営主的な爪を伸ばしはしないかと、かならず彼らを注視し、監視していくであろう、と。

こんにち、革命的な諸事件に当面して、おもわずしらずつぎの質問が生まれる。すなわち、われわれの戦術のそのような命題を、注解から綱領自体にうつすほうが、より目的にかなっているのではなかろうか、と。ともかくも綱領は社会民主党の見解の公式の全党的な表明であるが、注解はすべて、必然的に、あれこれの個々の社会民主主義者の多少とも個人的な見解である。だから、この問題にかんするわれわれの政策のより一般的な命題を綱領にもちこみ、注解のなかでは、たとえば切取地のような、部分的な方策や個々の要求を展開するほうが、より合理的ではないだろうか。

私の考えをもっと具体的に解明するために、私はここに、われわれの綱領のなかでこれに該当する地位を占めるような定式化をあげよう。

（ロシア社会民主労働党はなによりもまずつぎのことを要求する）。……「（4）農奴制のあらゆる残存物を除去するため、一般にあらゆる農村関係を民主主義的に改革するため、また地主の土地の奪取をも辞さない農民の状態の改善の革命的方策を取るための、革命的農民委員会の設置。社会民主党は、農民のあらゆる革命的民主主義的企図において農民を支持しながらも、農村プロレタリアートの独自の利益と独自の組織化とを主張するであろう。」

いま提案している定式では、これまで通常注解のなかで展開されてきたことが綱領のなかにもちこまれ、反対に、「切取地」は、綱領から注解にうつされている。このような変更は、綱領のなかでプロレタリアの立場の独自性がより明瞭にしめされるという優越点をもっているのであって、このような重要な問題における明瞭さは、文章構成上の欠陥全部を補ってあまりがある（そのような欠陥の一つは、綱領のなかに、明確な要求でなしに、通常は注解にはいるべき解説をふくめることである。とはいえ、われわれの綱領のなかにはそのような解説がすでにあることを、指摘しておかねばならない。たとえば、警察＝官吏の後見をうちかためる結果を伴う改良との闘争にかんする条項を参照）。

農民は切取地よりさきにすすむことはできないし、またすすんではならないと、社会民主党が農民にかたっているかのようにみる愚かな考えを、綱領が永遠に除去することもまた、優越点である。こういう考え方を綱領のはっきりした定式によって除去することが必要であって、注解のなかでそういう定式を解

説するだけにとどまるべきではない。私が提案している定式には土地収奪の明確な方法がなんらしめされていないということが、この定式の欠陥のようにみえるかもしれない。だがそれは、実のところ、欠陥であろうか？

土地問題にかんして書いた社会民主主義者たちは、この点にかんして空想計画にふけることがわれわれとしてどんなに不適当であるかを、なんどもしめしてきた。というのは、土地改革のもっとも主要な方策――土地国有化――も、警察国家では必然的にゆがめられて、資本主義制度のもとでは国有化へ接近することにすぎず、部分的方策にすぎず、可能な諸方策のうちのいくつかのもの、すなわち社会民主党がそれにとどめるつもりの全然ないような諸方策にすぎない。現在は、社会民主主義者は国有化に反対しているが、社会革命派でさえ、われわれの批判に影響されて、この国有化にたいしてはるかに慎重になっている（彼らの綱領の草案と彼らの以前の「勇敢さ」を比較せよ）。

だが問題は、革命運動が、常備軍の廃止やその他とならんで、われわれの当面の要求の一つである民主的共和制へと、われわれを導いていく点にある。

民主的共和制のもとでは、人民が武装しているときには、またその他の同様な共和主義的諸方策が実現されているときには、社会民主党は土地国有化にかんして、それをやらないと約束して自分の手をしばることはできない。だから私が提案する定式の欠陥は、外見上のものにすぎない。実際には、この定式は、現在の時機にとっての一貫した階級的スローガン――しかも、まったく具体的なスローガン――をあたえており、それと同時に、われわれの革命が好都合に発展したばあいには必要あるいは望ましいものとなりうるような、そういう「革命的民主主義的な」措置にたいして、完全な余地をのこしているのである。現在では、また、こんごも農民蜂起の完全な勝利までは、革命的スローガンはかならず百姓と地主との敵対を考慮にいれなければならない。そして切取地にかんする条項はこの事情をまったく正しく強調していた。ところが、ありとあらゆる「国有化」、「地代の移譲」、「社会化」等々は、――まさにこの点にそれらの欠陥があるのだが――特徴的な敵対を無視し、ぼかしているのである。

私が提案している定式は、それとともに、革命的農民委員会の任務を、「一般にあらゆる農村関係の民主主義的改革」にまでひろげている。われわれの綱領のなかでは、農民委員会はスローガンとして提起されているが、そのさいこの委員会は、まったく正しく、農民のそれとして、すなわち身分的なものとして、特徴づけられている。というのは、身分的な圧制は、下層の被抑圧身分全体だけがこれを一掃することができるからである。だが、この委員会の任務を土地改革だけにかぎる根拠があるだろうか？その他の改革、たとえば、行政改革、等々のためには、別の委員会をつくらなければならないのだろうか？

農民の不幸のすべては、私がすでにしめしたように、運動の政治的側面を全然理解していないことにあるのではないか。たとえ個々のばあいにもせよ、自分たちの状態を改善するうえでの農民の成功した革命的措置（穀物や家畜や土地の没収）を、農民委員会の設置および活動、また、革命的諸政党に（とくに好都合な条件のもとでは臨時革命政府に）これらの委員会を完全に承認させることと、結びつけるのに成功するなら、農民を民主的共和制の側に引きつける闘争に勝ったとみなしてよいであろう。このように農民を引きつけないかぎり、農民のあらゆる革命的な措置は

きわめて長つづきせぬものとなろうし、彼らがたたかいとったものすべては、権力をにぎっている社会諸階級によってたやすく取りあげられてしまうであろう。

最後に、「革命的民主主義的」措置の支持についていえば、ここに提案している定式は、農民による土地の奪取といったような方策の虚偽の、あたかも社会主義的であるかのような外観と、その方策の現実の民主主義的な内容とのあいだに、境界をはっきり引いている。このような境界をひくことが社会民主主義者にとってどれほど重要なものであるかを理解するためには、たとえばアメリカにおける土地運動にたいするマルクスおよびエンゲルスの態度を想起すれば十分である。（マルクスは一八四八年にクリーゲについて、エンゲルスは一八八三年にヘンリー・ジョージについて述べている）。もちろん、いまでは、土地のための農民戦争、土地の追求（半農奴制的な国や植民地での）を否定しようとするものは、だれもいない。われわれはそれの適法性および進歩性を完全にみとめるが、それとともに、それの民主主義的な、すなわち、結局のところはブルジョア民主主義的な内容を、われわれは暴露していく。だから、われわれはこの内容を支持しながらも、われわれとしての特別の「保留条件」をもちこみ、プロレタリア民主主義の「独自の」役割を、また社会主義革命をめざして突進している階級政党としての社会民主党の特別の目的を、指摘するのである。

プロレタリア革命
才2号

労働者共産主義委員会
神奈川県委員会発行
☎ 045 (774) 7067
木村一雄

三里塚取香団結小屋
守田力

価 300 円